

第六章

閉じ込められ、そして、追い出された時代

1870～1885

1870 年から 1885 年までの間は、ネブラスカのインディアン達にとっては、まさかさまに変化を遂げた時代であった。

19 世紀の始め以来、彼らの地域に広まっていった、病気、飢餓、死亡といったものによる暗い影が、最終的に、彼等の生き延びるための伝統的な生活様式を蝕んでいった。ネブラスカには、インディアン達を、彼等の保護居留区の周りを取り囲みながらそのなかに閉じ込めるような形で入植者達が溢れてきた。かれらに残されていた唯一の選択肢は、土地の分配をとるか、あるいは、インディアン強制区域にと移っていくことであった。そこには、彼等の保護居留区を昔のままで残しておく選択肢は何一つなかった。1870 年代の初めに最後のバイソンの狩が実施された。Hayt 長官は、この“バイソンの喪失”は、実際は、インディアン達に合衆国のなかでの新しい生活の条件というもの無理やりに受け入れさせようというもので、インディアン達にとっては、それは、“偽りの恩恵”であったと述べていた；しかし、現実には、彼等の生活の基盤を奪い、そして、彼等の考え方の主要な部分を時代遅れにさせてしまった悲惨な出発点となった。¹ 彼等の社会は、ずたずたに引き裂かれ、それが、その後の将来へと繋がっていった。しかしなお、したたかに彼等は、こうした薄暗い時代を生き残り、立ち上がり、そして、20 世紀に入っても、財産を奪われ、貧困に陥ったものの、決して打ちのめされることはなかった。

1873 から 1878 年にかけての辺境地（そして、国中全体が）における厳しい経済情勢の中でもなお、ネブラスカの白人達の人口は増え続けていき、その数は、1880 年には 1,500 万人にも達していた。この増加は、合衆国を西部に拡大してゆくことを考えていた 1860 年代の大流行のなかで大いに加速されていた。入植者たちの目に覚まさせるような形で、空いた土地に鉄道がどんどん敷設されていった。1880 年までには、ネブラスカの東部では、鉄道から 20 マイル—これは、幌馬車が一日に進める距離—以上離れた地域でさえ、彼等に残された土地はもう殆どなかった。ただ、僅か、遠く離れたポンカ族の保護居留区だけが、この鉄道網の外にあっただけである。(fig. 41)

入植者達は、依然として土地を得るために、土地家屋先買い権利法を使い、これを悪用し続けていた。1873 年には、向こう十年間は、支払いが猶予され、税金が掛からずに 160 エーカーが保持できる権利を与えるような効力を持つ、非常に簡単に巧みに行使することの出来る Timber Culture 条項の制定により、まことにくだらない憶測が乱れ飛んだ。² このようにして、1863 年の Morrill 条項を使い主要な投機家によりなされたような大きな取引が、その販売価格が、時に、1 エーカー当たり 10 ドルを越えてしまうというようなことが起こ

っていたにもかかわらず、農民達の上に広まっていったほど、土地に対する関心は強いものであった。そして、公共の用地には、荒れた、でこぼこの、もしくは、非常に遠い場所だけが、残された。

それまで以上に、あるいは、それ以後も、肥沃な保護居留区の土地は、インディアン達により利用され続けた、そして、それを望む入植者達から意図的に保留の状態にされた最も重要な開拓地域としてみなされていた。州知事の **David Butler** は、彼の 1871 年のメッセージの中で、ネブラスカの人たちに対して、保護居留区は、“われわれの州のなかでは最も農業に適した土地の 1 つ” であると述べ、そして、彼等の権利は抹消され、そして、インディアン強制区域か、或いは、どこか他の連邦政府により指定された場所のいずれかにインディアン達は退去するかの議論をもちあげ、この所感を述べていた。彼の後継者である **Robert Furnas**、彼は彼のオマハ族の行政官としてかれの就任期間以来の長い経歴のなかで(もし、それが彼の意図的なものでないとするば)到達したものであるが、その彼の、インディアン達の追放に対する要請は、ぶっきらぼうなものでさえあった。1873 年から 1874 年にかけての彼の度重なる演説のなかで、**Furnas** は、ネブラスカの州民は、彼が、“遊牧の民族” 達の“効率の悪い感化”と呼んでいるものから解放されるべきであると要請していた。このすべての激しい非難こそ、現実の刊行物の前兆であった：それは、“今、まさに、こうした原住民達により管理されている価値のある土地は、そこに、生産性を生み出すことの出来る知的で、企業心に富む人達の手に渡る道を開くべきである。” と言うものであった。³ **Furnas**、そして、多くのネブラスカ州の人たちにとって、この取り扱いは、正しくもあり、また、必須のものでもあった。

彼等は、このことについてインディアン局からなんらの議論を持ちかけられることもなかった。**Francis Walker** 長官、彼は、“平和政策”の擁護者であったが、そのかれが彼の 1872 年に提出した年間報告書のなかで、当時有力となっていた考え方を提示した：“人口の西部地域への流れは、否定されるべきものでもないし、かつまた、この地を自分たちの故郷と呼んでいるインディアン達のために、遅らされるべきものでもない。彼等は、服従するか、もしくは、消滅するかだ。”⁴ 勿論、このことは、1840 年代からのいろんな長官達により書かれてきたものに違いない。1870 年代に書かれたものの違いというのは、文明化の施策というものに時間が残されていなかったということであった。ネブラスカの保護居留区は、入植者達により取り囲まれてはいたが、殆どのインディアン達は、なおまだ、分配に頼らず、準備されたそのほかの手段でもなく、そして、自ら進んでそこに残り、アメリカ人たちと一緒に生活していた。引き続き、合衆国政府のインディアン達に対する政策は、基本的には以前と全く変らなかったが、そこには、二つの新しい展開があった。その 1 つは、文明化政策が、インディアン達が彼らの年金のために労働を強いられるようになり、子供達を学校にいれ、そして、彼らの行政官の命令に従うように強制されるようになると、次第に命令的なものとなっていった。二つ目は、インディアン強制区域にインディアン達を拘束するという概念が、末端的なものから中心的なものへと変化していった。ネ

ブラスカのインディアン達にとって、いまや、問題は次のような形となった：彼らは、何処にも彼等の故郷をもつことができないのではないか？

そして、この答えが 1880 年までになされた。ポウニー族は、追放され、そして、1873—75 年までにインディアン強制区域に移動させられた：ポンカ族は、1877 年に非常に厳しい拘束のもとで、同じような憂き目に会った：最後のオトエーミズーリ族は、1881 年に南の地域に移動させられた。唯一、オマハ族と、流浪の民となって生活することを拒絶したポンカ族の分派の部族が、激しい嵐の中で生き残り、彼等の保護居留区の一部に居場所を確保した。こうして、放棄された土地は、まるで、ずたずたになった防波堤をぶち壊して押し寄せる波のごとく、猛烈な勢いで入植者、そして、土地投機家達の手に入った。

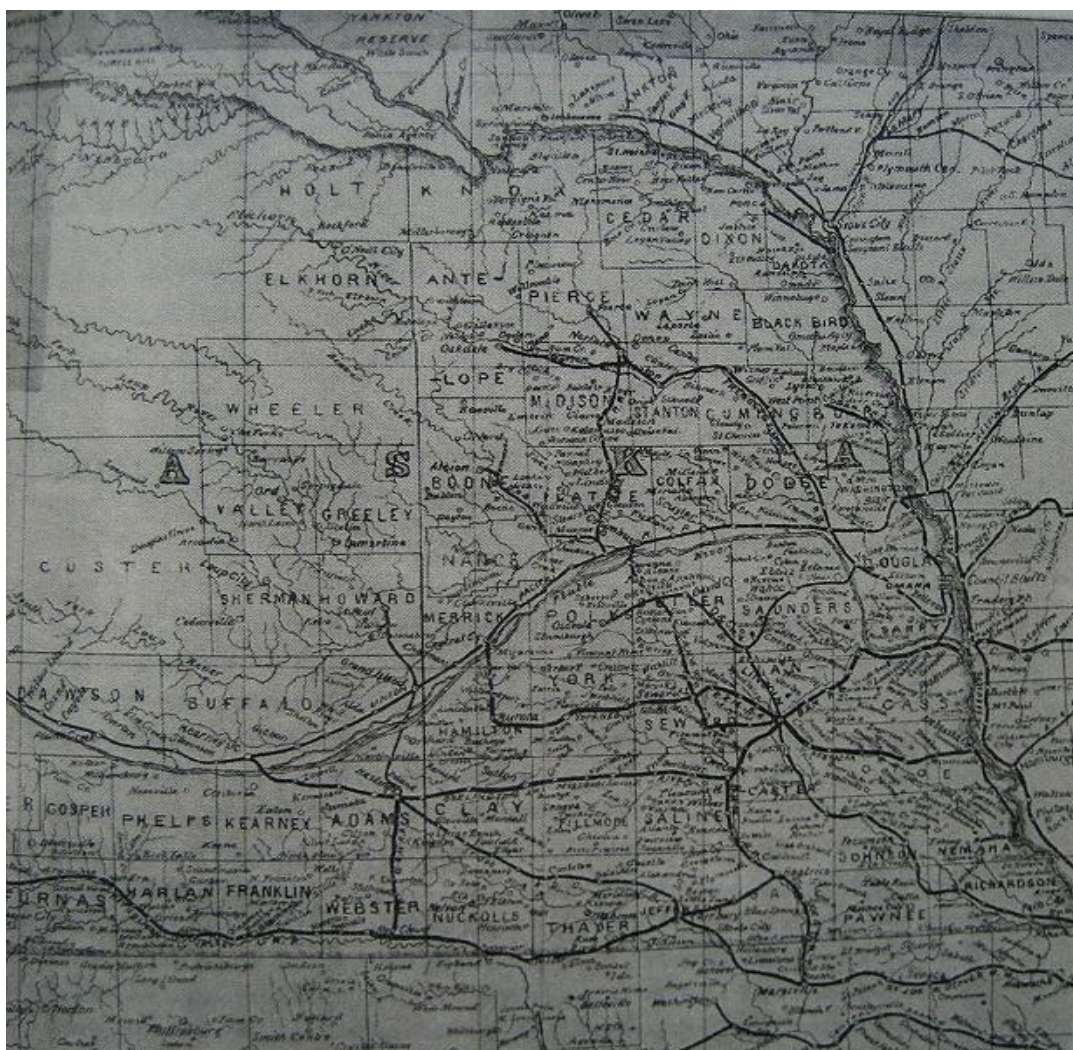


Fig. 41 ネブラスカ東部、ならびに、その周辺地域 1880 年
"Map of the Great State of Nebraska." の一部

Nebraska State Historical Society, M782, B92e の好意による。

追い詰められて南へ

1873 年の 10 月には、ポウニー族の 27 人の小屋のもの達、主として Chaui 族と Pitahawirata の部族の流れをくむもの、そして、Big Spotted Horse という Chaui 族の兵士の扇動で動いていたもの 485 人が、ネブラスカを後にし、インディアン強制区域の Wichita 行政地域に向かった。一年遅れて、インディアンの保護居留区についての決定的な会議が開かれ、ここで、夫々の部族の酋長、ならびに、指導者達は彼等の土地を売却し、インディアン強制区域の彼らのための新しい村に行くことに同意した。それは、彼等の祖先を一步一步見限る、辛い移動であった；しかし、それはまた、ネブラスカにおける生活が、あまりにも我慢できないつらいものであり、彼等の人間としての生き残りと言う問題が正に賭けられていたので、止む無き移動でもあった。

Table 8 Pawnee Demography, 1872 (and Comparisons with 1840)

<i>Band</i>	<i>Men</i>	<i>Wemen</i>	<i>Children</i>	<i>Band Total</i>	<i>1872 as Percentage of 1840 (see Table 5)</i>
Skiri	154	232	244	630	33.00%
Kithahahki	124	208	218	550	30.10%
Chaui	140	254	365	759	45.10%
Pitahawirata	91	182	235	508	54.70%
Pawnee Total	509	876	1,062	2,447	38.40%

Source: Troth, "Report," ARCIA, 1872, 224 (from census count taken Sept. 20 and 21, 1872)

彼等の人口が引き続き厳しい減少の一途を辿ったのは、こうした非常に厳しい生活条件の表れでもある。(fig. 11) 1875 年には、ポウニー族の人口は、1872 年と比べると 247 人も減少していた。もっと長い目でみると、1875 年までに、ポウニー族は、Reverend Dunbar が 1840 年に人口調査をしたときに数えられた数の、かろうじて 1/3 という数まで、減少していた。何処の部族も人口が次第に減少していったが、中でも、Skiri 族と、Kitkahahki 族は、最悪の状態で生活していた。(table 8) 1872 年には、成人の僅か 36.7% が男というのは、正に、その時代の悪さを示すものである。この男女の差、この差はほかのネブラスカのインディアン達では、1870 年までに殆どなくなっていたか、あるいは、目に見えて小さくなっていたものであるが、これがポウニー族では、1840 年のときよりも現に大きくなっていた。こうした状況では、狩に行くことすら危険な状態であり、そして、彼らは、大平原の南部地域に依然として襲撃が仕切りに発生し、男達には大変な負担となっていた。1871 年の 10 月の初めに実行されたある遠征では、ポウニー族の 205 人の戦士が取引のためと、そして、インディアン強制区域で襲撃をするために南の地域に出かけていった。シャイアン族の手にかかり 2 人のものが亡くなり、そのほか沢山のものが、“脳炎”で、さらに、それとともに、36 人もの男が死んだ。1872 年には、ポウニー族の 43.4 % が子供であった。これは、Dunbar やそのほかの者達がポウニー族の部落で子供達の数の多さ

にびっくりした、1840年の頃の状況からさしたる相違はなかった。そして、さらにこのことは、栄養失調や通常の病気の状態にもかかわらず、女達は依然として高い出産率を維持していたことを示している。しかしながら、こうした時代の殆どの期間は、出産よりも死ぬことのほうが圧倒的に多かったのであった。⁵

直接的にしろ、あるいは、間接的にしろ、このような死亡に関しては、ダコタ族には少なからずその責任があった。直接的には、彼等はことあるごとにポウニー族を殺したとと、そして、間接的には、彼らは、飢餓状態が定常的となるようなポウニー族の生活環境を作り出していたからであった。ダコタ族は、1870年から1875年の間にポウニー族を少なくとも100人を殺していた。このような殺人の殆どは、—70人以上が—600人から1000人というOglala族と、Brule族の戦士たちが、ネブラスカの南西部にあるFrenchman's Forkという合流点から続いている溪谷、ここはそれ以来Massacre Canyonという名前で知られるようになった場所であるが、ここでポウニー族のバイソン狩の集団を襲った1873年の8月5日に起こったものであった。その時、ポウニー族は、250人の男達と、100人の女達、そして、50人の子供達が居たが、彼等は、800頭のバイソンの肉と毛皮を抱えていて、これが足手まといとなり逃げる事が出来なかった。この集団を率いていた酋長の1人、Kitkahahki族のSky Chiefは、バイソンの毛皮をはいでいるときに、殺害され、そして、頭皮を剥がされた。女達と子供達は、無差別に殺された。死んだ者、傷ついたものは、溝の中に放り込まれ、そして、焼き払われた。ダコタ族で犠牲になったものは僅か2人だけであった。この襲撃集団は、さらに、ポウニー族の所有していた馬を100頭以上持ち去り、そして、鞍という鞍は殆ど、また、武器ばかりか、肉と毛皮も取っていった。1871年から1875年にかけて、250頭以上のポウニー族の馬がダコタ族により盗まれたが、もっと深刻な打撃が、彼等の社会と個人的な富と力のうえに持ち上がっていた。

6

ポウニー族は、勇気と獰猛さにおいてはダコタ族に匹敵するものがあり、ダコタ族が同盟していなければ、彼らは、数においてもやはり対等であった。(Lower Brule、彼らはポウニー族の最も根の深い敵であったが、その彼等の人口は、1876年には、1,188人であった。)しかし、いつも侵略者であったダコタ族は、奇襲をする優位性を持ち、そして、ポウニー族よりもずっと強力な武装をしていた。Garland Blaine、彼はポウニー族の先祖代々の酋長であったが、その彼が、後に、合衆国政府は、ポウニー族がネブラスカから追い出されるようにダコタ族に対して故意に鉄砲の供給をしていると苦情を述べていた。もし、このことが事実であったとしても、このことは、ダコタ族が毛皮の取引(彼等は、Black Hillsからその先、Republicanの共有地までのバイソンの狩猟領域を支配していた)で、或いは、襲撃などをして、鉄砲を手に入れることが出来たので、その必要性はなかった。一方、ポウニー族の(彼等自身の基金以外に支払われるべきものとして)武器の供給に対する要求は、繰り返し拒絶されていた。1874年の2月2日に、たとえば、部族会議が開かれたが、ここで、行政官のWilliam Burgessは、ポウニー族の武器と弾薬に対する嘆願を、

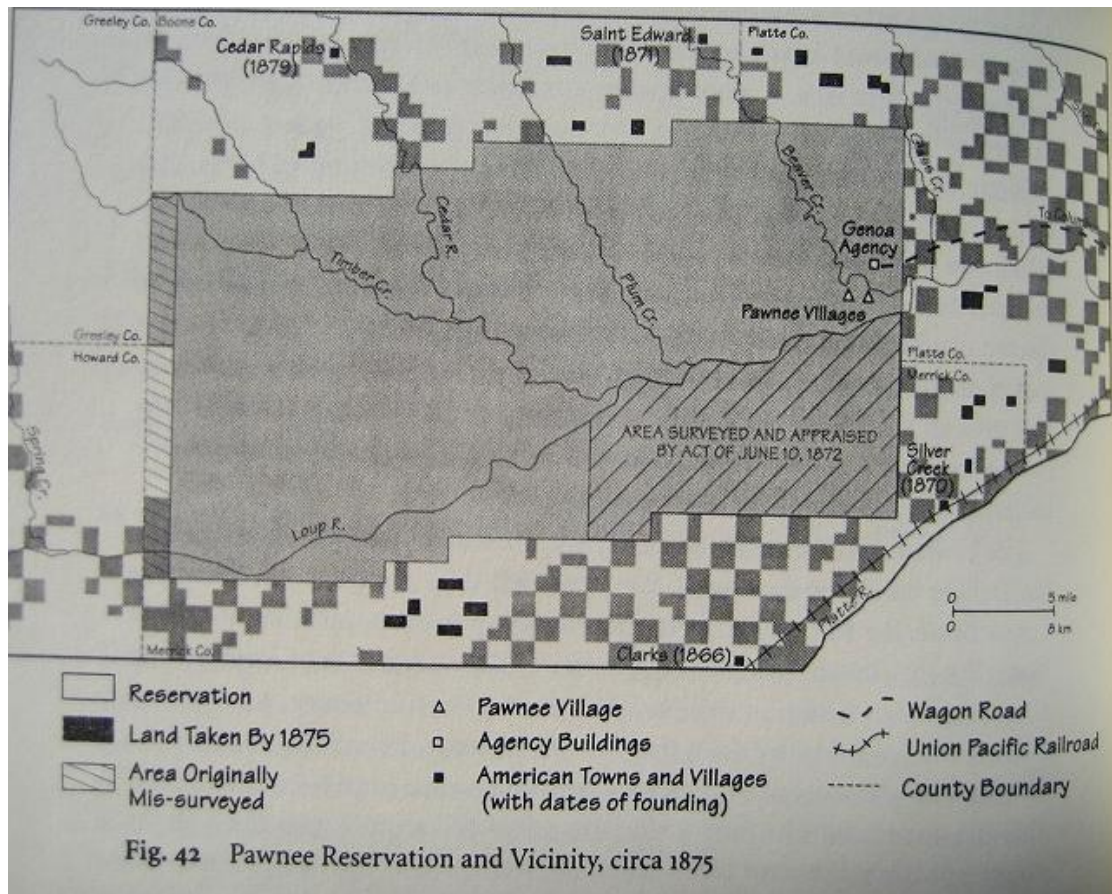


Fig. 42 ポウニー族の保護居留区とその村 1875 年頃

政府はインディアンに対して武器を供給するというビジネスをする立場にないといって、これをはねつけた。Burgess は、酋長達に対して彼等は自分たちの鉄砲を買うことは自由だと話していた。これは、その当時、彼等の年金の殆どが行政官とインディアン局によって分配されていて、そして、ポウニー族は彼等自身では自由になる金は全く持っていなかったもので、全く意味のない話であった。⁷

彼等は、政府の値打ちのある保護からの利得をなんら得ることがなかった。Barclay White 長官は、1871 年に、年金の分配をするためと、シャイアン族に対する襲撃に対し、申し入れをするために保護居留区を訪問した時、かれが集まった酋長達に合衆国政府が彼等を保護するつもりであるので、彼等はもはや何も恐怖を抱く必要がないと話して、その部族の指導者たちの集まりで、“嘲りの笑い”を招いた。⁸ 彼等はすでにそうしたもっともらしい言葉はそれまでに何度となく聞いていたし、その時でさえ、女達は畑にでて、また、子供たちは牧草地で、そして、狩にいけば、男達は何人も殺されていたのだ。確かに、軍は、狩に出かけた集団が Massacre Canyon で襲撃を受けた、その残虐な殺人が起る前に、僅かの期間だけそうした防備を実施していた。こうした防護の不足は、ポウニー族が、政府のダコタ族の襲撃に対してはその仕返しをしないという政策に追随していたので、其れ

だけ一層、罪になるものであったし、また、若い戦士たちの後悔に対して、そして、身内のものが殺された人たちにたいしては、ずっと大きな責任があった。彼等は、せめてもの慰めは、9,000 ドルが、ダコタ族に対する年金のなかから、1873 年 8 月 5 日の大虐殺で失われたものに対する補償として支払われたことであった。⁹

1870 年台の初めまで、ポウニー族はダコタ族との和解を模索していた。彼等は、この包囲された状態では、生きのびてゆくことは出来ないという現実をよく理解していた。Eagle Chief や Skiri 族の Lone Chief のように、酋長達のなかには、割り当てられた土地を取得し、そこでクェーカー教の政策と、安全な土地、そして、森林とともに生き延びてゆくことを望むものもいた。そうしたことから、行政官の Jacob Troth は、1871 年の春に、保護居留区の東の地域と、Loup 川の北側の地域を夫々 10 エーカーずつ、600 の区域に分割をすることをはじめた。1872 年の 6 月 10 日の条項が施行される前までに、夫々の者達が分配された土地に移動する、その資金を確保するために売却されるはずの土地、Loup 川の南側の土地 5,000 エーカーを測量し、そして、査定するための委員会が設置された。(fig. 42) しかし、当時、ダコタ族との戦闘がますます激しくなるようなときに、部族の者達を散り散りにすることは不可能なことで、この計画はなにひとつ実現しなかった。¹⁰

平和の協約は、1871 年には全面が見直されていた。Kitkahahki 族の酋長、彼は自分の妻がその直前に襲撃で殺されていたこと、そして、ダコタ族は、“自分たちの握りこぶしくらいの耳栓”をして、他人の話を聞こうとしないと信じていた、その彼の反対を乗り越え、ポウニー族の酋長達は、ネブラスカの北西部にあったサンテ族の行政区域で Spotted Tail と Lower Brule 族に会うことに同意した。しかし、Spotted Tail は、もし彼がポウニー族と和解の約束をすると、他のダコタ族の部族を怒らせ、憎悪されるだろうといって、その気持ちを翻してしまった。するとポウニー族が怒り、彼等の和解の提案は拒絶されるという恥の憂き目にあった。そして、ダコタ族は、ポウニー族がネブラスカにいた最後のときまで、彼等を襲撃し続けることとなった。¹¹

周りに入植していた白人達からの圧力は、それほど血を流すようなものではなかったが、しかし、決してそれは軽いものではなかった。1870 年以後、Union Pacific 鉄道が、益々開発され、入植者達に生活物資の供給が良好となり、そして、市場が開けていくと、入植者達は、Platte 川の北部や西側の地域からポウニー族の保護居留区を遠巻きにするように移動していった。(fig. 42) 価格の高くなった Union Pacific 鉄道に払い下げられた奇数番号の鉄道用地と、そして、延々と広がる草原、ならびに、沼地以外は、保護居留区の東と、南に繋がる地域はすべて、1875 年までに、買い取られてしまった。こうして入植地が保護居留区の北側と西側で益々断続的に干渉するようになった。Boone County で、北側の地域についての権利の主張が、合衆国の東部からやって来た貧乏な農民、彼はインディアン達とはあまり変わらず、自分の木造の家が出来、そこに移る前までは、共同の芝生で覆った家に住んでいたのであるが、その彼により初めてなされた。¹² 入植者達は、1875 年までに、保護居留区の北の境界辺りから流れ出てくる水路を建設した。彼等は、Loup 川

と、その北の土手にある支流の **Spring Creek** に沿って、西に向かって住んでいた。そして、何人かの農民が 1872 年の秋に、その水路が東側に 1.5 マイルほど長くなっていたことを、そして、彼等が実際にインディアン達の土地に住んでいることを確認するというこのためだけに、保護居留区の西の境界の直ぐ近くに家屋を作った。(fig. 42) **White** 長官は、ポウニー族はすでに過剰な土地を保有している、のにもかかわらず、彼等はエーカー当たり、1.25 ドルの支払い、もしくは、6,000 ドルを手にしており、これは、政府の過ちであり、何も入植者たちを追い出す理由はないと考えていた。¹³

1872 年の初めのころは、保護居留区のまわりには木々が生い茂り、水は豊富で、そして土地はとても耕すことが容易であったといわれていた。大平原の上のほうと鉄道の区域は、1870 年代の半ば頃まで、もしくは、それ以後かなりの期間、あまりものがなかった。保護居留区は、まさに、“移住の波をひっくり返してしまう壁、もしくは、その巨大な起伏によりその流れを隠してしまう”、そのような障害物であるかのごとく見られていた。さらになおかつ、そこは、“ネブラスカにあるような素晴らしい大地が、400 平方マイルの広さで広がっている”かのように考えられていた。¹⁴ そして、**Union Pacific** の幹線に非常に近いところにあり、肥沃な土地に恵まれ、水が溢れ、木々が生い茂っているところでもあった。さらに、そこには石炭も出るという噂まであり、これは、慢性的に燃料の不足している地域にとっては非常な魅力であった。¹⁵ 引き続き、1870 年以降、人口増加の圧力が増大してくると、ポウニー族を追い出そうという動きが、本格化してきた。

入植者達は、ポウニー族をネブラスカから追い出すための彼等の宣伝活動のなかでは、ごく普通の議論を展開していた：彼等は、怠け者であり、有り余る土地を所有していながら、それを殆ど利用していないし、彼等は、政府からの気前のよい援助で生活している。この最後の不平は、これは、生活保護と土地に対する合法的な支払いとを混同したものであるが、これが特に、不景気な状況のなかで生活にあえいでいた貧乏な入植者たちの間に幅広く広まっていた。¹⁶ クェーカーの施策は、究極的にはポウニー族を分配した土地に定着させるという運動であったために、これもまた、批判的となってしまった。この地域にいた入植者たちは、自分たちの周りにポウニー族が居残ること、とりわけ、明らかに彼等の分配地のために選ばれた、水が豊富で、しかも、木々の生い茂った土地に居残ることを望んでいなかった。1873 年の 3 月に、27 人の **Platte County** の市民が、クェーカー教の保護居留区に関する管理についての不満を申し出た。つまり、インディアンについての行政的な出来事を統制しようとする努力、ならびに、ポウニー族を退去させようという努力が誠に持って心もとないという不満であった。行政官の **Burgess** とクェーカー教は、長い調査のあと、その嫌疑が晴れた。¹⁷ しかし、ポウニー族を追い出し、その土地を手に入れようという策略に熱心な開拓地の取引商人の **Lester Platt** や **Delane Willard** らとともに、反対論が依然として、執拗に残っていた。¹⁸ あえて言うまでもなく、クェーカー教徒の行政官は、周辺の入植者たちについて低い評価をしていた：彼等は、取引商人たちのいわば、“寄生虫のようなもの”であり、そして、保護居留区の北の地域に住んでいる“白

人としては品位のない連中”は、ダコタ族と同じように沢山の馬を略奪するようなことをしていると考えていた。¹⁹

極僅かの開拓地の入植者は、クェーカー教徒に賛同し、ポウニー族が集団で移動させられてゆくというやり方に異議を唱えていた。たとえば、Charles Wooster、彼は1872年に、丁度保護居留区の東にあたる Merrick County に入植した人物であるが、かれは、ポウニー族は、“非常に友好的であるし、また、白人が彼を恐れている以上に、白人に対して恐怖を感じている”と、考えていた。Wilhelm Dinesen、彼は、1872 から 1873 年にかけて Platte County に住んでいた教養の在るデンマーク人であったが、その彼は、問題はポウニー族の側にあるのではなく、略奪を繰り返している白人達や、インディアン達に“極僅かの期間に、……われわれにだってそれをするのに数千年も掛かったようなことを”受け入れるように迫っている政府の非現実的なやり方に問題があると理解していた。そして、Moses Turner は、The Platte Journal によく出てきた社説のなかで、ネブラスカの僻地には殆ど見ることでできないような人間性を備えたインディアン達の権利を擁護し続けていた。しかしながら、こうした支援者達の間では、ポウニー族は彼らの保護居留区を保持することを許されるべきであるというような議論は誰一人していなかった：誰も、インディアン達が分配地に移動をしていく時間があるなどと考えることすらする人が居なかった。²⁰

僻地に居る入植者達との諍いが、ポウニー族の持つ樹木を盗むということに集中した。こうした盗難は、1860 年代には、日常的に起こっていたことであつたが、しかし、この問題が、入植たちが溢れ、木の家を建てたり、木が燃料として使われ始めた 1870 年以後、急激に増大していった。行政官たちのいる土地の周辺には樹林が殆どなかったけれども、保護居留区の南を横切っていた Loup 溪谷の近くには、ポプラの木や柳の木がまだ沢山残っていた。入植者達は、とりわけ、冬の近くになると、当たりかまわずこの木を盗んで切り倒していた。1872 年までに、Loup 川から保護居留区の南の入植地まで行く、“はっきりとそのための道”ができていた。ポウニー族の酋長が、Troth に、この盗難伐採の実態を調査するように依頼した。11 月の初めに、彼は、その道を辿り南にいき、そして、Clarks への道に建っているありとあらゆる家がポウニー族の持つ木を使っているということを発見した。Troth は、“その地の最も有力な、そして、影響力をもった入植者” — 法律家とか、村の長、さらには商人たちまでが、貧乏な村人達と同じように、それをともに利用していた。彼等は、このことを認めてはいたが、しかし、この問題は、自分たちには、木を盗んでくるか凍死するかの問題なのだと説明していた。明らかに、保護居留区の南側の土地から、50,000 エーカーを売却するという計画が、入植者達に、ここにある木を切っても当然という言い訳を与えてもいた。入植者達は、この樹木の代金を支払うことに同意しており、そして、ポウニー族は、彼等の失われた所有物に対して、3,000 ドルを受け取っていたように、その支払いは確かに実施されていた。²¹

しかし、ダコタ族の襲撃のように、樹木の盗難が、ポウニー族がネブラスカから退去する方向に進めていった。1874 年に、Judge Elmer Dundy が、オマハの地方裁判所で、地

方裁判所は、保護居留区で起きた犯罪に対して、これを裁く立場にないと判決した以後、木々の伐採する規模がどんどん大きくなっていった。²² 入植者達が、そうした犯罪を理由に法廷に持ち込まれることは殆どなかったが、しかし、この決定は、明らかに盗伐を認めるというものであった。1874年の1月に、*Platte Journal* が、入植者たちが生活に必要としている木々ばかりでなく、もっと大体的にあきらかに商業目的のためにも盗伐が行われていると暴露した。毎日、数百台という荷車で木が運び出され、保護居留区の近くにある製材所に積み上げられていた。²³ ポウニー族がそうした場所を監視していたが、それは、全く無駄なことであった。こうしてみると、明らかに、ポウニー族が退去する前でさえ、入植者達は、すでに、保護居留区にある資源はいつでも手に入るものと決めていたのだ。

ポウニー族に対する圧力は、入植者やダコタ族による地方で発生したものというものばかりでなく、Washington D.C.からも、次第次第にきびしく、文明化の政策という形で締め付けが発生していた。インディアン局は、キューカー教徒の統治官や行政官を通して、ポウニー族の金がどのように使われているかをきつく管理し、インディアン達が、保護居留区から離れるのを制限し、そして、いろいろな決定事項をする上では、酋長を通さずにするようなことをしてきた。

1870年以後、ポウニー族への年金は、現金にしろ、物資にしろ、酋長の手を通さず、夫々の家族の長に行政官や支配人により分配されるようになった。こうしたことは、以前には、貧乏な家族は彼等の取り分を手にする事ができなかったもので、実際的には前よりずっと公正であったが、しかし、酋長達にはきつい侮辱であったし、手っ取り早く裕福になる手立てが制限されることになった。そして、富がポウニー族の社会に再分配される形になった。首長たちは、会合でことあるごとにこれに不満を漏らしていたが、この施策が定着した。彼らは、最終的には、年金のなかから拠出された、一年間あたり 100 ドルという手当てで折り合いを付けられ、そして、1872年には、主酋長に対して渡された Grand 大統領のメダル 4 個で暗黙の了解をすることとなった。こうして、個人の年金以外にもはや何も払われるものはなくなった：半年間の支払われる 15,000 ドルの年金の詳しい内訳は、医療に 100 ドルが当てられ、行政官のところの施設の修理と土地の調査のために 3,000 ドルが、そして、酋長達と兵士に対する手当てとして 3,000 ドル、さらに、個々人に対する割り当てとして、8,000 ドルがあたられ、残りは、合計 3.75 ドルずつ、夫々のポウニー族の者のために残された。²⁴

こうしたものの以外のポウニー族の歳入は、行政官により、これもまた厳しく管理されていた。たとえば、Jacob Troth は、50,000 エーカーの土地の売却から先の将来のやり方は、ポウニー族が牛を購入できるように現実にお金を要求してくるのを却下して、利益を生み出すような基金の口座を設けるようにするのが良いだろうと主張していた。彼等が樹木を購入してしぶしぶ支払った 300 ドルでさえも、彼等の“改善のための基金”に取り込まれた。村中のポウニー族の子供達が食料の供給を必要とし、飢餓に苦しんでいるときにさえ

であった。²⁵

このほかにも沢山の拘束が、ポウニー族の、彼等自身の生活物資に対しての見せ掛けの自由の上にもものしかかっていた。金属製のものの支給物資には、刻印が為されていて、ポウニー族はそれを取引商人に売却することはできなかった。小麦粉の支給は、子供を学校に入れない親たちには、保留されていたし、1人の兵士などは、沢山の部族から従軍に登録するよう強要されていた。そして、10年間の間厳しい仕事についたあとでの利得について説得された人たちにとってわけの分けの分らない要請だったに違いないが、Troth は、ポウニー族たちに、安息日には労働を差し控えなければならないと話していた。びっくり仰天した Sky Chief は、自分は“神が休息のための一日を確保している”なんて話は聞いたことがないと応えていた。²⁶

最も重大な自由の剥奪は、ポウニー族を保護居留区に拘束しようというものであった。1873年の5月2日に、Burgess は、“安全な状態ではない”ので、ポウニー族は、許可証なしに保護居留区を出てはならないと通告した。兵士達が、鉄道の駅からオマハに行くまでのすべての道筋に、ポウニー族を守るために配備された。（僅か一年前には、Barclay White が、Union Pacific の鉄道の駅には何処にもたむろしている“インディアンの何もせずぶらぶらし”、そして、“旅人に非常に悪い印象を与えている”連中について不満を漏らしていたばかりであった。）²⁷ こんな状態であったから、1873年の10月に、Big Spotted Horse が、二枚の許可証を持って、485人のインディアン達を引き連れてインディアンの強制区域に向かったときには、White はひどく腹を立てた。彼は、彼等の部族の者達が退去することを許可したとして、酋長達を叱咤し、もし、彼等が部族の者達を管理できなかったら、その時には、それができるほかのものに酋長を任命すると警告をした。Pe-ta-na-sharo は、自分は年をとっているし、また、なにも悪いことをしているわけではないと反論した。しかし、White は、彼を無視し、“政府が言ったときには、それには従え”と、わけの分らないことを言っていた。²⁸

毎年、ポウニー族は狩に出かけていく許可を申請しなければならなかった。1870年から1873年まで、行政官は、彼等が農業に頼り、そして、年金だけでは生活してゆけないということが分っていたので、しぶしぶ彼等に承諾を与えていた。彼らは、ポウニー族に許可証を持たせて、そして、入植者達から狩人を守り、如何なる略奪をも防ぐために2人のアメリカ人のお目付け役を伴わせ、出発させた。おそらく、ポウニー族は、狩が彼等にとっては必須のものであったので、たとえ許可がなくとも狩に出かけていったであろう。Pe-ta-na-sharo が、Troth に 1871 年に説明していたように、“そこにバッファローが居る限り、われわれは狩に出かけて行きたいのだ—われわれは、もし、われわれが偉大なる精霊に肉を奉献しなかったときに、彼がどんなに怒り、そして、われわれを虐げるのか、それを恐れているのだ。”ということであった。Troth がこれに答えて、“われわれは、偉大なる精霊がわれわれに好意を持ってくれるまで、彼に肉を捧げることはない。”と言っていた。

当時、バイソンの狩の日数はかなりの数になっていた。そして、いつも、Eagle Chief は狩に出かけて行っていたが、バイソンの数が殆どいなくなったと、1872 年の議会で話をしていた。³⁰ Pe-ta-na-sharo は、それはアメリカ人のせいだといい、議会での非常に印象的な演説のなかで、彼は、“バッファローは、われわれのものだ。われわれの父たちが、この大地とバッファローを育ててきたのだ。われわれは、土地は白人達に売却したが、しかし、バッファローは売ってはいない。”と White に反論した。³¹ ポウニー族にとって、終焉は、バッファローの群れが消え去る前にやってきた。1872-1873 年にかけての冬の狩は、ダコタ族、彼らはポウニー族の居るその前で、大草原を焼き払い、そして、彼等は危険な地域に押し込めていったが、その彼等のために、狩ができなかったのだ。このため、殆どバイソンをし止めることができず、また、ダコタ族が 100 頭以上の馬を略奪し、このために、ポウニー族は歩いて保護居留区まで戻らなければならなかったのだ、共有地に隠れて過ごすこととなった。³² 1 人のポウニー族の少年が殺された。これは、8 月に、Massacre Canyon でおきた大惨事の前触れであつたに過ぎない。それ以後、White は、直ぐにポウニー族の狩の特権を廃止し、彼等が分配地にいる間、彼らに、肉の配給—毎週、各家長に、2 パウンドの肉—を支援するという施策を提案した。³³ こうして、それ以後、ネブラスカでのポウニー族による狩は途絶えた

1872 年以後、ポウニー族に降りかかった一連の災難の間に、狩が中断されたのは僅か二度ほどだった。そして、それが彼等を崩壊寸前の状態に追い込んでいった。1870 年から 1872 年にかけて、彼らは自分たちで何とか生活を維持していた：彼等の収穫は、行政官の管理地を干上らせるほどの干ばつのなかでも、かなりの成果があり、そして、夏に実施した狩では沢山の獲物を確保できたし、ダコタ族の襲撃も一段落の状態であつた。³⁴ なんと、この時期には、僅かながらも人口の増加が見られた。(fig. 11) そして、1872-73 年の冬の狩に出かけたが、この時にはポウニー族の手元には、トウモロコシの実やマメは殆どない状態であつた。そのあと、じとじとした春が続き、作物の植え付けの時期が遅れてしまい、穀物が十分に成長するほどの時間がなかったので、収穫は減少してしまった。Beaver Creek の水量が増し、水は土手を越え、ダムが決壊し、新しく改造された製材機や粉挽き機を壊してしまった。さらには、Massacre Canyon での事件があつた。白人達は、その年のポウニー族のことを、“彼等の歴史の中では比較にならない”、ほど、“極貧の状態”に追い込まれていたと記述していた。³⁵ 7 月に Burgess により実施された医学的な調査では、彼等の村に、腺病、腸チフス、そして、肺炎が蔓延していることが分った。³⁶ このことは、1873 年の秋に、Big Spotted Horse の移住へと落とし込まれていくわびしい後退であつた。

Big Spotted Horse は、実際には、インディアンへの強制居留区に行くための許可証を持っていた。彼と彼の家族、ならびに、2 人の友人達は、ポウニー族の自治区から引き上げ、ウィチタ族と一緒にいるという白人達による許可を与えられていた。これは決して新しい政策と言うものではなかった。1880 年代になり、George Bird Grinnell に話された彼等自

身の話によれば、この政策は、当初 1871 年に Kitkahahki 族の Lone Chief、のときに始まったものであり、それがそのあと直ぐに、Big Spotted Horse と Chaui 族の兵士である Frank White により実行されることになったものであった。1873 年に、Big Spotted Horse と White は、ウィチタの行政官を訪問し、そして、正式に彼等に加わることを提案した。その当時、人口が 250 人にまで減少していたウィチタ族は、この新しい加入による部族の強化を歓迎し、そして、豊富なバッファローと、“肥沃な土地が沢山ある”と誇張して、ポウニー族をもてなした。³⁷ 1873 年にも、ポウニー族をおそった継続的な災難が、あらゆる懸念を追い払って、移住をどんどん進めることとなった。

Burgess と Pe-ta-na-sharo は、当初、急に立ち上がったポウニー族が離れるのを阻止していたが、彼らは、結局出かけることにした。10月18日の白熱した議会で、Pe-ta-na-sharo は、White に、すでに沢山の Chaui 族の者達は出発したと話した；ter-re-kaw-wah は彼に追隨していた Pitahawirata 族のものもやはりすでに出かけたと打ち明けた；そして、La-sharo-tu-ri(Good Chief) が、彼の部族の Kitkahahki の四つの小屋に住んでいた者たちが Platte 川で次の指示を待っていると付け加えた。³⁸ 唯一、キューカー教徒の政策に最も忠実であった Shiri 族だけが、土地の分配を受け入れ、そして、まじめに子供達を学校に送るなどして、集団で留まっていた。任命されたすべての酋長達が移動することに反対していた。彼らはネブラスカに残り、支配人の White からの懲罰を受け、そして、彼等自身が突然にその権威を失うことを懸念していた。

人口の 1/5 もしくは 1/4 (出展によれば)とも言われる、居なくなったポウニー族は、ウィチタ族の行政官のところで冬を越した。ネブラスカに残った人たちは、Burgess の言葉を借りれば、“非常に穏便であったが、問題ばかりだった。”³⁹ 彼らは、その年は狩が出来ないと、そして、ダコタ族からの 9,000 ドルの補償金は、彼等の牛と生活物資のために使われるだろうと話された。農業での収穫を増やすためのありとあらゆる努力をする中で、Burgess と White は、年金のすべては“役にたつ道具”に使われ、現金は何も残らないと取り決めていた。穀物の成長は、バッタの大群が襲来し、畑に育っていた作物を食い荒らした 8 月までは、かなりよかった。John Williamson によれば、博士たちは、これは彼らがここを去ることになった否定できない前兆だったと説明していた。尊敬の念を禁じえないキューカー教徒たちでさえも、彼等はもはやポウニー族をネブラスカにとどめて置くことは出来ないと認めていた：“こうした環境のもとで、”と、Burgess が報告していたのは、“作物が破壊され、狩をして得られる食べ物も、毛皮も、或いは、腱も何もないこれから先、彼らは、自分たちの生活環境がすでに変わってしまったと思い、まさに打ちひしがれた状態だ。”とのことであった。⁴⁰

1874 年の 9 月まで、ポウニー族は猛烈な飢餓状態で、殆どの者がここを去ることを望んでいた：“もし、われわれが狩のできる南に移動しないなら、われわれに残された道は、飢餓と死しかない”と、酋長達は嘆き悲しんでいた。⁴¹ Platt と Willard が、Chaui 族や Pitahawirata 族に仕切りに彼等の小屋を解体し、その柱の木や財産を売り払うように仕向

けてきて、こうした状況をまねいた。**Burgess** は、こうした取り壊しを止めようとしたが、結局は、彼の意見は無視された。唯一 **Skiri** 族だけが彼の意見に従ったが、それでも彼らは、惨めな状態に落ち込まれた。彼等の酋長の 1 人が **Williamson** に告白しているように、“今や、われわれは白人でもなければ、インディアンでもなくなった。”のだ。⁴²

退去の項目は、1874 年の 10 月 4 日の議会でポウニー族に提示された“協約”の項目のなかに記載されていた。⁴³ 酋長達は、その詳細の多くの項目について同意を拒んだが、しかし、彼らは、ここを退去しなければならない状況であることを認識しており、そして、最終的には、それに屈服した。インディアン局は、ポウニー族のために、彼等の保護居留区を“市場の最も良い値”で売り払ったのだろう；新しい保護居留区、ここはおおよそ 300 平方マイルの広さで、ここが、ポウニー族にも承認された場所として、これまで誰も住んでいないインディアン強制居住区の“好ましい地域”のなかに選ばれた；ネブラスカの保護居留区の売却からの売り上げは、新しい住居を改造するために当てられ、とりわけ、ポウニー族を分配地に定住させるために使われたのであろう；ポウニー族の基金は、彼等が退去するための費用としては一切使われなかった（条項はその後も無視され続けた）；そして、ポウニー族は、一端、新しい場所に定住をさせられると、もはや、“猟場の権利”を放棄すると約束した。早急に退去するために準備された合意に付随して、補足的な解決策、すなわち、寒い冬が来る前に、ウィチタ族と一緒に、直後の間の食料とそのほかの資材を確保するためにバイソンの狩をするため、そして、新しい家の準備が整うまで政府の庇護の下にネブラスカに残っている、年寄り、ならびに、多くの酋長達をふくめ若いポウニー族の不慮の出来事に備えるため、そして、“寄生虫ども”－“腹黒い連中”や“女々しい男達”－、彼らは、過去にポウニー族を悩ましていた連中で、彼等が将来も彼らの生活を邪魔してはならないよう、そうした連中を排除するための付随的な事項が盛り込まれた。とりわけ、最後の条項は、こうした、最終的な数ヶ月の間、インディアン達は実際に“寄生虫ども”の 1 人、**Lester Platt** を、**Burgess** からの仕事を引継ぐために、そして、彼等をインディアン強制居留区に導くために必要としていたので、インディアン達ばかりでなく、クェーカー教徒たちの状況をもよく表していた。酋長達は、“神は **Burgess** を見捨てた”との思いになっていた。⁴⁴

ポウニー族は、移住するための時間を一時も無駄にしなかった。一連の移住の歴史的な記録は不明瞭であるが、しかし、40 の小屋に住んでいた先に移住した者達は、南に向かい 10 月の 10 日に出発していた。⁴⁵ そして、彼等は、ウィチタの行政官の居るところに、まさに飢餓状態で到着した。**John Williamson** に同行された二番目の集団が、二週間遅れて出発した。この人たちは、約 250 人程の“強く健康な体の男達”達からなる狩猟集団であったと思われたが、しかし、彼らが、**Platte** 川を渡り、**Hastings** の近くを通り過ぎるときまでには、さらに、1,000 人もの男、女、そして、子供達が加わっていた。**Williamson** たちの、まことに足手まといになる連中を引き連れた集団は、アーカンソー川の **Big Bend** に向かって、**Jewell**、**Mitchell**、そして、**Lincoln** のカンザス地帯を一日 10 マイル程度の足並

みで、南の Great Plains への昔からのポウニー族の道を辿った。(fig.43) そこから、道は、カンザスからインディアン強制居地域への直接入り、ウィチタの行政官地域で温かく迎えられようになっていた。

White の 1875 年のレポートによれば、部族のうちの大半の 1,800 人のポウニー族がその年の冬をウィチタで過ごした。Pe-ta-na-sharo は、かれの一団が Loup 川を横切る前にうけた銃撃による負傷から、なんともわからない状況下のもとで死んでしまい、その集団の中にはいなかった。彼は、外見上は、その旅の中で不慮の死を遂げた 2 人のうちの 1 人であったが、しかし、ひどい飢え、悪天候、さらには、次第に募っていく望郷の念が、南への旅の間に彼等にのしかかり、そして、それはインディアン強制地域で彼らがこれから数年間の間に直面することになる脅威の状況をぼんやりと予示していた。

行政官の Burgess も、新しい保護居留区を選択するための Edward Smith 長官からの指示を持って、11 月の末にネブラスカを離れ、南へと旅をしていた。彼は、彼が楽観的に、アーカンソー川とシマロン川の支流の間、丁度、オセージ族の保護居留区の南側と、Sauk and Fox 族の保護居留区の北側 (fig.43) 辺りを“素晴らしい地域”と言うことで述べていたものを選択した。283,026 エーカーほどの土地が、1876 年の 4 月 10 日の条項のもとで公式にチェロキー族とクリーク族の区域から、結局はネブラスカの保護居留区の売却により入ってきた資金を元手に購入されたのだろう。⁴⁶

1875 年の 6 月の初めに、Williamson は、気乗りのしないポウニー族をウィチタの行政官区域から彼等の新しい居住区に移住をさせた。彼らは、この最後の退去に同意はしたが、しかし、ウィチタ族が南に移動することを強く勧めていた、一緒か、あるいは、近くに住んでいた、彼らの友人達は、突如として 150 マイルも離れた地域の人となったのだ。こうして、また、彼等はうまく操られ、裏切られたと思ったのだ。かれらの部族は、Black Beaver Creek の行政官地域の近くに、夫々独立した土作りの家とティピーの村を作った。議会は、彼等の退去に対して何の基金も、支援も認めなかったもので、彼等は、緊急用の支給に頼って、何とか生活をしてゆき、ネブラスカから到着する最後の避難者を迎えるために食料をもとめカンザスの州境辺りまで放浪していた。

1874 年にインディアンの強制区域に向かう前に、ネブラスカにおける Burgess の最後の行動の 1 つは、信用の篤い Skiri 族に、彼等の小屋を解体し、行政官の居る場所の近くに移設する許可を与えることであった。⁴⁷ そこで、彼等と、工芸訓練学校の生徒を含め残った人たちは、新しい保護居留区で彼等の親戚に合流する許可をほぼ一年の間待っていた。彼等が待っているときに、彼らは、入植者達が彼等の土地から木々を切り倒し、そして、彼等を守るために Omaha Barracks からの小さな守備隊の集団が居たにもかかわらず、いつものダコタ族の襲撃があるのではと予測し、恐れおののいていた。こうした不幸が 8 月に現実となった。兵士達が居たにもかかわらず、ダコタ族が、Eagle Chief の妻を、彼女がトウモロコシを干しているときに殺害し、馬の面倒を見ていた少年を射撃した。⁴⁸ 最後のポウニー族の集団、数で 370 人が、1875 年の 10 月に、政府の支給した幌馬車を使い、その

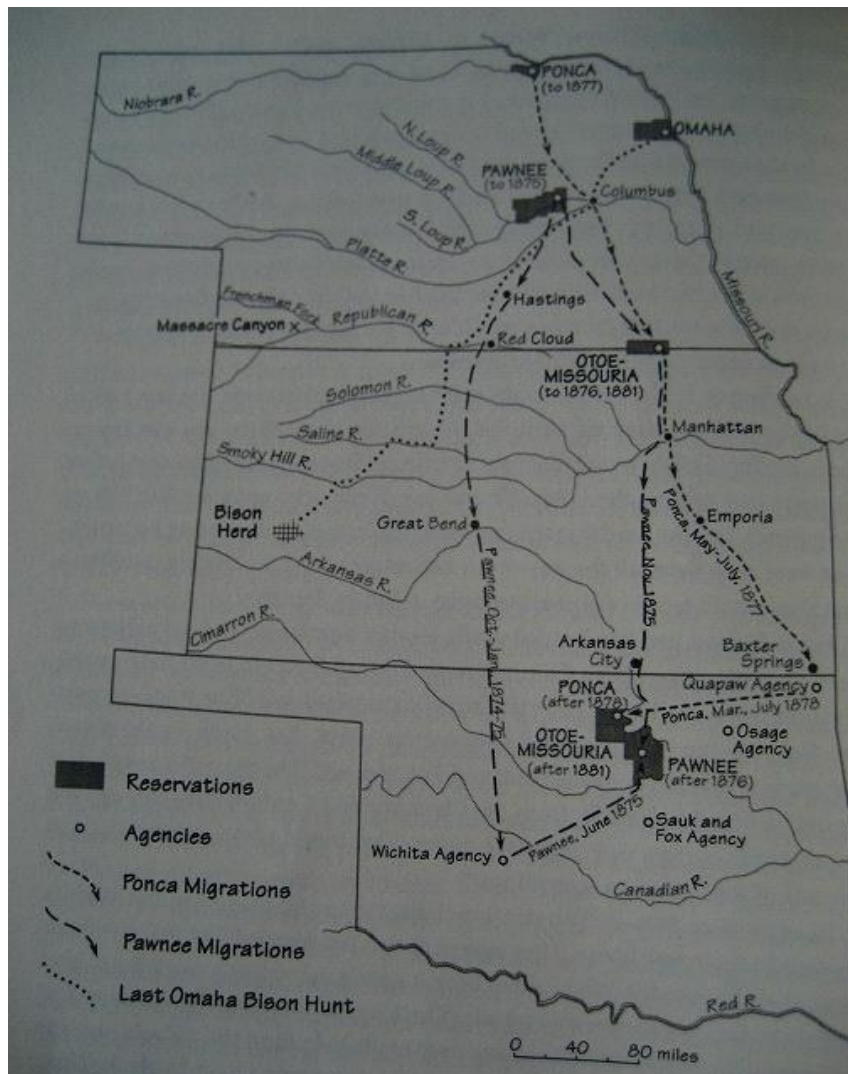


Fig. 43 インディアン強制居留区への移住、 1874－1881

前の年に彼等の血族の一派が使ったルートよりもっと東側の道を辿って、ネブラスカを旅立っていった。彼らは、彼等の新しい土地で栽培するために神に捧げたトウモロコシの種を持っていたが、しかし、かれらはそれを、何百年と言う間そこに住んでいた思い出とともに、自分たちの神聖な場所、彼らの祖先たちの居る場所に残してきた。

インディアンの強制居住区では、生活はただただ悪くなるばかりであった。新しい保護居留区は、その殆どが、土は薄く、そして、木々は灌木だけで起伏が激しい地形をしており、彼等の以前のネブラスカの土地よりも良いことは1つもなかった。病気、とりわけ、マラリアとインフルエンザがはびこり、そして、生活のための基金が不足し、Burgess が、1875年に彼の報告書のなかで、“悪い矛盾だ”と述べている状況にポウニー族を追いやることになった。基金は、最終的にはネブラスカ保護居留区の売却からの売上金が入ったときに支払われるという条件で借りた、政府からの3,000ドルの借入金により1876年の秋に準

備された。彼らもまた、1857年の協定以来、継続的な教育のための基金、農業器具、農民と鍛冶屋の基金とともに、毎年、30,000ドルの永久年金を受け取るようになっていた。こうした基金にもかかわらず、彼等の人口は、1876年の2,036人から、1885年には1,045人へと激減しており、その時点で、彼等の行政官は、彼らは消滅の運命にあると説明していた。(fig.11)⁴⁹

ポウニー族は文化の面でもまた、萎縮をした。毎年の生活の状況を方向付ける環境面での兆候は、インディアンの強制居住区では同じではなかった。そして、如何なる場合でも、バイソンの肉が儀式の中で奉納されることはなかった。多くの儀式—たとえば、Skiri族の連合体の形を象徴しているFour Pole Ceremony—は、“取り返しのつかない”状況にあった。⁵⁰ 1889年にGrinnellに話をしていたChau族の酋長は、バイソンの肉があり、神聖な道具を入れた袋も傷ついてはいなかった時代、そして、雷が一年の始まりを知らせるものだと頼られていた時代、彼等の儀式をする生活が生き生きしていたつい直前の時代のことを思い出していた；しかし、事態はすべてが変わってしまった：“こうした神聖なことを通じて、われわれは、崇拜をして来たし、また、天上の支配者に対して奉仕が為されてきたのだ。これがわれわれを救ってくれていたように思われるし、また、われわれは、生きながらえ、繁栄し、そして、たくましく生きてこられたのだ。北に居るときには、最初の雷を聞き、これを崇拜するときには、われわれは決して嵐に襲われることはなかった。しかし、ここに来て、もはや、たとえそれが鳴っても雷を崇拜することはあきらめた。”⁵¹

次第に、そして、時に、仕方なく、家族は、それぞれ個人の農地に定住を始めた。Pitahawirataが変化に対して激しく抵抗を示していた間は、Skiri族が、1889年になってもなお自分たちの土作りの家の村に住み、そして、“市民服”を着るのを避けて、その先頭に立っていた。1893年には、土地の分配が、1892年の11月23日のJerome合意に基づき、最終的に押し付けられた。ポウニー族の保護居留区が撤廃された：“余分の土地”として、171,088.37エーカーを残し、111,931エーカーの土地が160—、ならびに、80—エーカーの土地に分割され、夫々の家族と独身の成人に分配された。ポウニー族には、当初、補償金として\$80,000の金硬貨が支払われた。余分な土地は、1エーカーあたり\$1.25で販売され、\$212,916.71となったが、先の\$80,000が差し引かれた。残りの\$132,916.71は、実際には、ポウニー族がU.S. Court of Claimに対して訴訟を起こした直後の1920年まで支払いが為されなかった。1894年に、ポウニー族の行政官のJ.P.Woolseyは、“彼等は、完全に自立できる合衆国の市民となり、彼等に分配されていない土地は白人達の住むところとなった。”⁵² と言って、誇らしげに政府の最終的なゴールの達成を報告していた。ところが、この分配は、ポウニー族には何一つ安堵を与えるものではなかった。彼等の人口は、1900年までには、650人にまで落ち込み、生活がうまく行き出して次第に人口が増加していく以前の1917年までは、このまま、700人以下という状態が続いた。⁵³

一方、ネブラスカでは、彼等の土地は、1876年の6月10日の条項に基づいて売却に出された。土地は、160—エーカーの区分に分けられ、公の競りにかけ最も高い値段で売られるこ

とになっていた。現金なら 1/3 まで下げられるという売却の項目と、6%の利子で2年の分割払いで支払われるというどちらかであった。1878年の競りで売却が始まり、Grand Island の土地事務所での個人的な入札と言う形で続けられた。1883年までに、保護居留区の殆どすべてが売却され、Nance County 地域となった。購入される区画の数については無制限で、そこにすまなければならないという制約もなければ、再販売も自由で、そこを開拓することに関する条件もなかった；言い換えれば、これは、投機家に対する公然たる解放に過ぎなかった。全体の土地の半分以上が、僅か、55人の買い手に渡ったのだ。Delane Willard は、Genoa の最高級の土地を手に入れ、そこで、直ぐに、大穀物倉庫の持ち主となり、銀行を経営し、その街の市長になった。Lester Platt は、鉱脈で大金持ちになる前の、1875年に亡くなった。主要な買主たちにより購入された大半の土地は、1880年代の投機boomで、大変な利益をもたらして再販売された。⁵⁴ こうした人たちは、ポウニー族が見習うように話されていた自作農の農民達ではなかった。

保護居留区を売却することにより手に入った収入は、全部で、\$750,000(エーカー辺りで \$2.70) になり、これは、1877年の土地調査により評価された見積価格に近いものであった。しかしながら、ポウニー族が、インディアン強制区域での最初の2・3年の間、彼等を支援するために使われた 3,000 ドルに対して政府に弁済するまで、そして、Creek 族と、Cherokee 族に対し、彼らの新しい保護居留区のための支払い(\$177,010)をするまで、彼等は、ネブラスカの土地の売り上げから来る、僅か、@280,000 の手元金、或いは、1 エーカー \$1 でやり過ごさなければならなかった。彼等は、土地はもっとずっと価値のあることを良く知っていたし、最初は、彼らもずっと適正な支払いを受けていた。⁵⁵ しかし、過去にもそうであったように、彼等は、貧困のために無理やりに、政府の言いなりにならざるを得ず、そして、正に、生き残りのために彼等の故郷の最後の最後の痕跡までも売らなければならなかったのだ。

ポンカ族の追いたて

ポンカ族は、ポウニー族の後を追ひ、南の1877年にインディアンの強制区域にやって来た。ひっきりなしのダコタ族の襲撃がその原因ではなく、彼等自身が壊滅的な貧困のためでさえあったが、しかし、政府がそれを法令で決めていたこともあり、彼らは、ポウニー族に対するよりももっと厳しく、立ち退きを迫られていた。ポンカ族の退去の不公平さと、英雄的な帰郷、そして、Standing Bear の試み(彼の指導で、1880年代の初めまでに、およそ 170 人のポンカ族を彼らの Niobrara の故郷に再び住ませた) は、インディアン達を保護するためにもっとつよく人道的に移住させるという国家的な動機、刺激となった。しかし、ポンカ族にとっては、永続的な退去は、彼らの社会の分断であったし、彼らに集積された記憶の上の、悲劇によって刻まれた深い傷跡の苦難そのものであった。

1878年から1877年にかけて、ポンカ族の八つの部族が彼らの保護居留区(ここは、法的な根拠からすれば、1868年以来、Great Sioux Reservation の南東の隅に当たる) の東の

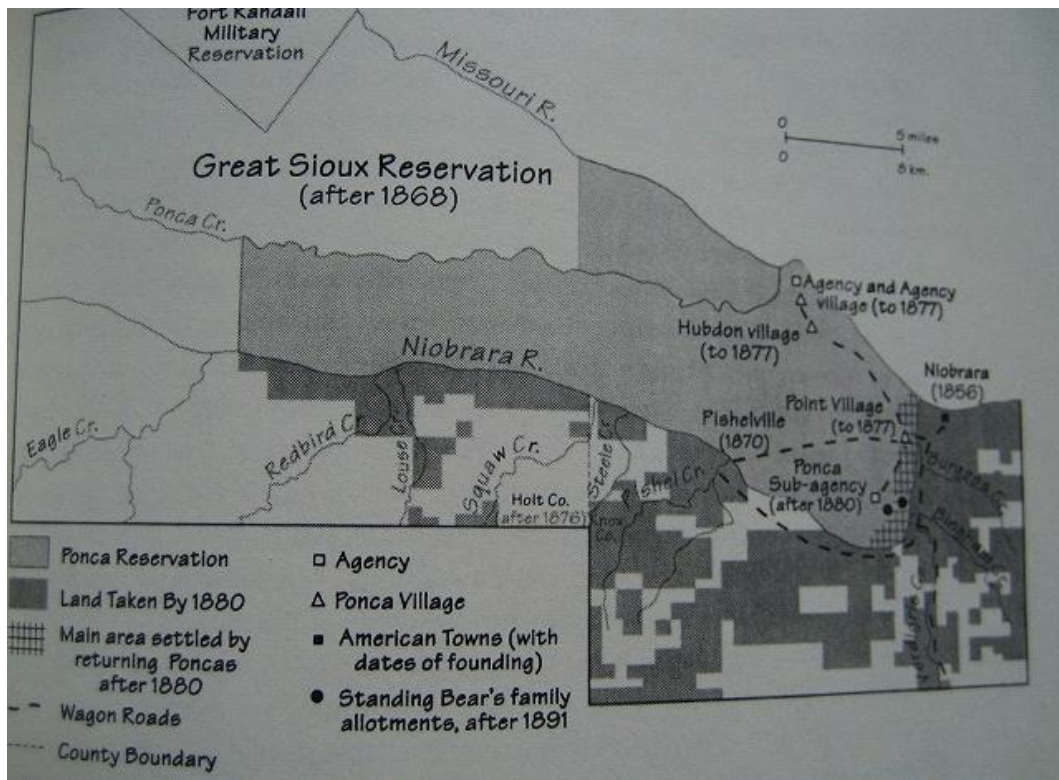


Fig. 44 ポンカ族の保護居留区とその村 1877—1891

はずれに三つの部落に別れて住んでいた。89 家族、もしくは、377 人の人が、行政官の区域の、荒廃した倉庫、作業場、そして、従業員達の住んでいた街のそばに、土作りの家や、木造の家を建て、そこで暮らしていた。(fig.29,ならびに、44) 行政官のいる地域に住んでいたインディアン達のおよそ 1/3 は、主として Antoine Primeaux の部族の血を引く、混血の者達であった。1873 年までに、ミズーリ川の行政区域を東側に 100 ヤードまでは行かないが、動かしていた。その年の 7 月 3 日に、川が土手を破壊し、古い村と畑を新しい川の流れの中州に残した形で河原に氾濫し、このため、行政官の Charles Birkett と、ポンカ族たちは、西に 1.5 マイルほど行ったところに新しい家を建てなければならなかった。二番目の部落は、丁度、行政区域の南側の立派な Hubdon 地域にあった。ここには、24 の純粋なインディアンの家族と、一握りの混血のインディアン、合わせて 144 人のポンカ族が住んでいた。この中には、Standing Bear の部族の者達がかかなり含まれていた。三番目の村は、Niobrara 川の土手の北側、川からは 1.5 マイルほど、そして、行政官の居るところからは 6 マイルほど離れた場所にあった。ここは、主として、White Eagle と Standing Buffalo の部族に属する純潔のインディアン達、およそ 250 人が住んでいた Point Village というところであった。この場所は、西に開けた平原からの Brule 族の襲撃を受けやすい危険な区域で、Point Village は、何度も、(とりわけ、夏の間は、)、行政官の居る区域に建てられたティ

ピーのほうに行って空き家にしていた。⁵⁶

1860 年台にポンカ族を取り巻いていた悲惨な状態は、依然として続いていた。アメリカ人の観察者達は、村のあまりにも悲惨な状態に恐れおののき、そして、恥じ入っていた。Reverend J. Owen Dorsey、彼は 1871 年の 5 月から 1873 年の 8 月まで、ポンカ族に対する聖公会の宣教師であり、直ぐに、熱烈に歓迎された民俗学者になったのであるが、その彼は、支援の根拠を殆ど明らかにすることができなかった。彼がそこで見たものは、飢餓であり、壊血病であり、腺病であり、そして、死であった。殆どのインディアンが、真っ裸に近い状態であった；すこしだけましな者は、ぼろぼろになった毛布や毛皮を纏っていた。Dorsey は、そこにあまりにも不公平があることを知った：おとなしい人たち、彼等は政府から明らかに見捨てられた人たちであり、そして、ダコタ族からの慈悲を施してもらう状態にされていた。彼らは飢餓の状態にある間、ダコタ族の沢山の部族に対する友好関係の見返りとしての支援物資を溢れるほど積み込んでミズーリ川を遡っていく蒸気船を眺めていた。ポンカ族には、そうした行動力はなかった：彼等は、他の人たちに対して恐怖心を与えるほどの力がなかった。こうした状況についての Dorsey の印象は、1872 年に行政区域に滞在していた小さな兵隊の一員であつた、Lieutenant Martin E. Hogan も同じような印象を抱いていた：“人道主義の名において”と、彼は William Welsh（彼は、インディアン行政長官委員会の創立メンバーの 1 人であった）に対して言っていた。“死にかけたポンカ族を救うために何かをしなくてはならない。さもなくば、彼等は、“絶滅する”かだ。

57

この自暴自棄の状態は、どうしても止めることの出来なかった平和のパイプの儀式を継続したことによってもたらされたものであり、そのほかには、政府の無視の政策によるものであった。自然そのものも彼等にとって厳しいものであったということをポンカ族は、感じなければならない。彼等は保護居留区にいた最後の七年間の間、一度としてよい収穫の年を過ごすことは出来なかった。毎年、バッタの大群が彼等の穀物畑を食い荒らし、そして、干ばつは殆どの年で、経費を積み重ねさせていた。さらには、雹が降ったり、ミズーリ川が氾濫したりするなど、穀物畑は完全に破壊されつくしていた。彼等のもつ馬の群れ、そして、牛の群れもまた、1873 年の春の雪嵐のため壊滅状態にあった。ある家族もまた、この嵐のなかで、薪を集めに言っているあいだに亡くなった：彼らは、天気が回復したあと、川にはまり凍死の状態で見つされた。彼らは、作物の収穫がなく空腹の腹を満たす食料はなにもなかった。記録に残っている最後のバイソンの狩は、1870 年の夏に行われた。保護居留区を離れ、そして、狩の領域で Brule 族に遭遇することを考えると、これは、あまりにも危険なことであった。こういうことで、1871 年のあと、行政官は、その狩を許さなかったのであろう。⁵⁸

政府は、救援物資を支給した。—ビーフ、ベーコン、ラード、小麦粉、砂糖、そして、コーヒーなど—そして、これらは、収集された根株や豆、さらには、荒らされたトウモロコシの畑から拾い集められたものと一緒に、ポンカ族の空腹となった食欲に提供された。

しかしながら、1872 年以後、彼等はこうした配給を得るために、毎朝、8:00 に鳴渡る“労働の鐘”の呼び出し音に呼応して、働きに出なければならなかった。この規則は、Edward Smith 長官により、考え出され、Birkett により実際に運用されるようになったもので、最初は、純潔のインディアン達により抵抗を受けていた。しかし、結局は、White Eagle さえも、この列に加わっていた。現実には他に手立てがなかった：選択肢は、“働かざるものに一小麦の支給はなかった。”⁵⁹

年金の支給は、1858 年の協定以来毎年、だんだん縮小されていったが、なおも為されていた。ポンカ族は、1873 年まで、毎年、10,000 ドルの年金を受け取っていて、それ以後は、1888 年まで、年間、8,000 ドルが支給されていた。そして、農業、ならびに、機械の補助のために自由裁量のお金もあったが、これは、Dorsey によれば、一年間、一人当たりにして、\$11.50 という額の品物かあるいは、お金であった。大体は、夫々 2 人のインディアンに対して、一枚の毛布程度であった。夫々のものに対して、5 ドルという小額の現金支払いでは、飢饉や遠隔地ということで値段が急激に高騰していた辺境の地では、食料や衣類は殆ど手にすることはできなかった。ポンカ族のインディアン達は、蒸気船の燃料に薪を売り、そして、収穫時に入植者達の農場で働いて、極僅かの金を作り出していたが、しかし、これだけで家族の食料を確保するには不十分であった。農業の支援の効果も殆ど上がっていなかった：1876 年には、この時は刈り取る機械がなく、小麦は、肉切り包丁で刈り取るしかなかった。このため作業効率が非常に悪く、収穫の多くが畑で腐ってしまった。

60

農業開拓も、また、間違いなく、ポンカ族のことを“自分たちの捕虜”だと誇っていた Brule 族によって邪魔をされていた。インディアンの作業員達は、自分たちの村から 1/4 マイル以上離れたところには行こうとしなかった：行政官のところの作業員はいつも自分たちの脇に鉄砲を置いて作業をしていた。保護居留区の東の地域は、1871 年に、8 エーカー分ずつ分割されてはいたが(fig. 39)、勿論、分配地もとても安心できるような状態ではなく、行政官はそこに入り込んでいくのを進めようとさえしなかった。毎年、春の初めになり、草原の草が彼等の保有している馬の餌になる程よく生えてくると直ぐに、Brule 族の襲撃が繰り返され、荷役用の馬を盗み、家畜を殺し、そして、ポンカ族を殺害し、頭皮を剥いでいった。襲撃は、夏の期間は、“あまり頻繁ではなく”、そして、彼らは、ポンカ族のインディアンの強制区域への追放を続けていた。⁶¹

ポンカ族の因果性は、インディアンは、もともと自分達の家を、勇気を持って守るという意識を持っていたので、あまり高いものではなかった(彼らが、1870 年から 1877 年までの間に人を殺したのは、わずかに四人だけであったという記録がこのことをよく示していた)。たとえば、1873 年の 6 月 9 日に起きた事件では、Brule 族が二つの集団を、その一つは、丘から戻ってくるグループ、そして、もう一つはミズーリ川にそって北から下がってくる集団であったが、襲撃した。しかしながら、このときポンカ族は、ちょうどミズーリ川に近い丘から Yankton 族が知らせをくれて注意を促していたので、備えが出来て

いた。ポンカ族の男たちと女たちは、U.S.の兵士 7 人からかなり周到な助けを借りて、襲撃して来た連中を平原に追い返した。あるときには、Brule 族が 200 人以上もいたこともあるが、そのほかの主な戦いは、1875 年の 6 月 6 日に起きたもので、このときもまた、襲撃部隊が撃退された。

ほとんどの地域で、ポンカ族は単独でダコタ族と対面するような形で置いて置かれた。1872 年の 7 月以降、行政官のところに、軍の小さな派遣部隊が(5 人から 20 人程度) 定期的に駐屯していた。しかし、彼らは、明らかに、もし攻撃を受けたときにポンカ族と、“公共の建物”を守る訓練を受けていただけだった。彼らは、畑をパトロールすること、襲撃してきたものたちを追撃すること、あるいは、行政官の区域に移動してきたり、そこから出て行ったりする幌馬車を守ることなどは禁じられていた。政府は、ポンカ族に対して彼らを守る手立てを提供することにはっきりと反対していた。Dorsey は、彼らには最新のライフルはわずかに二丁しかなく、あとは、旧式のショットガンと、二・三丁の回転式連続銃、それに弓と矢だけだったと推定していた。一方、ダコタ族の方かというと、彼らには馬がよく配備されていて、政府から直接支給された、元込め式のライフルで非常によく訓練されていた。行政官の Birkett は、繰り返し彼の上司を通して、鉄砲と弾薬の支給を嘆願していたが、しかし、政府は、これに対して何も応えなかった。⁶²

そのほかにも沢山の紛争が、ポンカ族を極貧に追い込み、そして、分裂させていた。彼らの最初の行政官である、Henry Gregory (彼らの最初の独立した行政官である J. Shaw Gregory の兄) は、合衆国の大統領に申し出た酋長たちの彼に対する不満により、1872 年の 9 月に辞任させられた。Gregory は、ポンカ族の教育と農業振興のための基金の着服と、Standing Buffalo の妻 (酋長は、そのことですぐに彼女を離縁していた) も含め、“毎晩、毎晩”インディアンの女達を自分の家に連れこんでいたかどで告訴された。⁶³ そのあと、行政官が聖公会プロテスタントの宣教師の勧告により任命され、そして、彼らは、以前よりもかなり誠実になったのかも知れないが、ポンカ族を苦痛から解放することには、あまり効果的ではなかった。Charles Birkett は、彼の多くの時間を、無駄な鉄砲の支給の嘆願のためと、1875 年から彼の後継者となった A.J. Carrier、彼はポンカ族が畑で働きたがらないのはダコタ族に対する恐怖よりかれらの怠惰のためだと信じていた非常に厳格な男で、その彼のために時間を費やしていた。Carrier は、もし、子供たちが学校に行かないのなら、その子供たちへの支給を保留すると脅して、新しい政策の段階に強行に推し進めていった。彼は、ポンカ族の間での彼らの地位になんらの変わりももたらすものではなかったにもかかわらず、酋長の Standing Buffalo, The Chief, Big Soldier そして、Standing Bear らを“有害な影響力を持っている”との理由で退位させた。Carrier は、聖公会により、自分が (有害だとのことで) 罷免される前のわずか一年間の間、この職務についていた。⁶⁴ Carrier のあと、行政官が来て、そして、また、すぐに交代するということが続き、一彼らが、ポンカ族の退去の大混乱の中で捕まえられたと同じ数ほどの年の間に、一4 回ほど起きた。

ポンカ族の社会のなかにも重大な紛争が起き上がった。こうした事態は、特に、混血のもの達と純粋なインディアンたちとの間の考え方の違いによるものであった。ポンカ族は、ほかのどのネブラスカのインディアンの部族よりも、ずっと混血のものの数が多く、そして、また、その比率も高かった。—1876年には、その数は、150人で、20⁶⁴ 名であった。純血のインディアンたちは、混血の人たちを、保護居留区の近くに住んでいる入植者達の、あるいは、結婚してインディアンたちの家族になっている入植者達の“手先”であるかの如く考えていた。1873年におきたある血筋に関する事件で、**Antoine Le Revere**、彼は、長い間、保護居留区の中か、あるいは、その近くに住んでいたもので、行政官地域から来た混血のものと結婚していた、“飲んだ暮れの、粗暴な”人間であったが、その彼が、**Standing Buffalo** の弟の **No Knife** と果し合いをした。その喧嘩が済むと、**No Knife** の体には、四発の弾丸が打ち込まれていたが、しかし、その弾丸の傷は、致命傷になるほどのものはひとつも無かったが、一方、**Le Revere** のほうは、弾丸が彼の頭をつけぬけ、死んで地べたに横たわっていた。⁶⁵ 混血の人たちと純血の人たちとの分裂は、追いたての圧力がはっきりしてくるにつれ、ますます広がっていただけだった。

しかしながら、ポウニー族や、オトエーミズーリ族とは違い、ポンカ族は周りの入植者達との間では、さして重要な紛争は起こしていなかった。保護居留区における人口の増加による軋轢はたいした問題ではなかった。1787年以降にだけ、沢山の数の入植者達が、**Pischelville** の周辺にある小さな村に向かい、**Niobrara** の町から南、もしくは、西に向かって移住していた。(fig. 44) 1872年に、**Verdigre Creek** 川沿いからの入植者のひとつの集団が、ポンカ族が穀物を盗み、彼らの土地で子馬を育てたり、物乞いとをしていると不平を言って、ポンカ族に対してかなりきつく謝罪をするよう訴えを申し出ていた。入植者たちは、ポンカ族が飢餓状態にあると理解していたが、しかし、彼らもまた非常に貧困であったし、また、同じような環境のもとでの苦難の被害者でもあった。一方、ポンカ族の方からも、入植者達は、**Niobrara** 川を渡ってきて、彼らの木材を切り倒しているというような不満もあった。⁶⁶ しかしながら、概していえば、彼らの関係は良好であった：ともにダコタ族の恐怖を感じていたし、自分達が遠く孤立していることの苦難を耐え忍んでいるという気持ちは共通であった。事実、この地域の入植者達は、ポンカ族が退去することに対してはもっとも声高に反対していた人たちの仲間でもあった。

ポンカ族の保護居留区そのものが古いものであるのと同じように、古い考えを復活させるような追いたての提案が1873年に起き上がった。最初、計画は、1872年に調査をされて、そして、土地の評価がなされていたオマハの保護居留区の西の地域にポンカ族を定着させようというものであった。**Birkett** は、1873年の11月に、**Smith** 長官に、その移動の問題を持ち上げると、すぐに **Smith** が、“両方ともにそこを望んでいる。”と言って、その承認をした。1875年の報告書の中で、**Smith** は、再び、ポンカ族がオマハ族の近くに移り住むことを弁護していた。基本となる論理的根拠は、オマハ族とポンカ族は非常に近い関係にあり、彼らは、お互いに婚姻関係も持っているというものであり、そして、ポンカ

族はオマハ族の保護居留区のなかに自分達の生活の場を築いたほうがずっと安全だというものであった。しかし、1875年に、新しい目的が起き上がってきた：空になったポンカ族の保護居留区は、行政官にとり、“野蛮なスウ族の連中”、とりわけ、**Spotted Tail** に統率された **Brule** 族、ならびに、**Red Cloud** に率いられた **Oglala** 族を監視するためのもってこいの場所になるというものだった。そこは、ミズーリ川の近くにいる彼らに、容易に物資を供給したり、あるいは、かれらを管理したりすることのできる絶好の地域と考えられた。1876年になり、インディアン局は、議会に対し、ポンカ族は、オマハ族の保護居留区のなかの **Logan Valley** に移住させられるべきだと議会に要請をしたが、しかし、その代わりに議会は、もっと急いで、インディアンの強制居塾への移動するよう、25,000 ドルを充当した。⁶⁷

この案は、少なくとも、1875年の初め以来持ち上がっていたもので、もちろん、インディアンたちを強制居住区域に“集結させる”という一般的な計画と一緒に、うまく考えられていたものであった。一方、**Birkett** は、オマハ族と一緒に住むということを考え出した者であったし、**Carrier** は、インディアン強制居住区への迫いたてを支持することに躊躇していた。1875年の2月に開催されたポンカ族との最初の会合で、**Carrier** は、この問題を取り上げた：9月に彼は、現在ある保護居留区と、新しく手に入る土地を示す、インディアンの強制居住区の地図を要請した；そして、11月に、彼は、インディアンの強制居住区のなかの新しい保護居留区を選択するために酋長達の代表団を結成するように提案した。⁶⁸

当初、貧困からの苦難と彼らが耐え忍んでいる紛争でうんざりしていたポンカ族の酋長達は、この計画に非常に興味を示していたように思われる。事実、1875年の議会では、彼らは、“ダコタ族の勢力範囲にある彼らの現在の保護居留区からインディアンの強制居住区への退去を強く望んでいること”を表明するような嘆願事項に、みんながサインをしていた。⁶⁹ この熱意さは、ポンカ族がすぐに自分たちの故郷から立ち去ることに対して重大な良心の呵責を持つようになったことから、多分、**Carrier** によって作り出されたものであったのだろう。彼らは、最初は、インディアン強制居住区の中にある有望な地域を査察し、そして、いつもそうであるように、**Washington D.C.**を訪問し、大統領と彼らの将来のことについて議論をすることを仕切りに望んだが、しかし、彼らはこの退去をためらい始めた。しかし、1876年では、そのことはすでにあまりにも遅すぎた：お金がすでに充当され、インディアン局の腹はすでに決められ、そして、事態は、連邦政府とインディアンとの関係の歴史のなかでもっとも恥さらしな話のひとつとなるところまで進んでいた。

後に、インディアンの強制居住区のなかで、彼らの行政官である、**William Whiteman** が、それはまさにダコタ族からの逃亡であり、政府がなしえた“唯一の公正な、かつ、人道的な出来事”であると正当化していたポンカ族迫いたての“真実の歴史”を残すことを主張するようになるのだ。**Whiteman** は、ポンカ族が移住をさせられ、そして、彼らが望んでいたのだと唱えていた。引き続き行われた政府の代表団による調査で、**Whiteman** の説明は事実を捻じ曲げたものであるということが、証明され、この退去は、強制的に行

われたものであり、まったくもって情けないその手順は違法なものであり、不公平なものであることが明らかにされた。⁷⁰

1876 年の議会の政府支出金に関する法案で、ポンカ族は彼らの承諾が無い限り、どこへも移動をさせられるものではないということが明確にされた。しかし、政府の調査官である E.C. Kemble が、1877 年の 1 月にポンカ族の行政区域に到着したときには、いかなる必要な手段を用いても、彼らを移動させるように定められているということが直ぐに明らかになった。

後の 1880 年に、上院の委員会が、ポンカ族の悲劇に対しては、彼は、“自分の責任を理解していなかった”人物として、この Kemble に大変な責任があるとしていた。⁷¹ Kemble 自身が、ポンカ族に対して、傲慢であり、且つ又、冷淡な態度であったことも事実であった：Standing Bear が、委員会に対して、彼は、彼らに対して“何の哀れみ”の気持ちも持っていないと話していたのだろう。しかし、責任の大半はインディアン局の彼の上司、彼は、ポンカ族がポンカ族の行政区域で、移転しているダコタ族を攻撃する意思を固めているとのことで、彼らを退去させることを推進するよう承諾していた。委員会の委員である John Q. Smith が Kemble に宛てた手紙のなかで、“ポンカ族の退去は、強行に進められるだろう。Spotted Tail と Red Cloud は、この夏には、ミズーリ川の方に移住しなければならない。彼ら自身、ポンカ族がかれらの昔からの居住地にさらに留まることを不可能にするものなのだ。”と書いて、このことを明らかにしていた。アイオワ州の上院議員である Samuel J. Kirkwood は、委員会の報告書のなかで、少数意見であるとして書いてはいるが、Kemble 自身は、“escapegoat”に過ぎず、適切な疑問を投げかけていた：なぜ政府は、1868 年のポンカ族を Great Sioux の保護居留区に導くという“大失態”を正す、いかなる努力も払おうとしなかったのか？ 同時に彼はまた、なぜ政府は、ポンカ族を彼らの保護居留区に保護するという約束を完遂することが出来なかったのだろうかということも問題にしていた。

Kemble の最初の施策は、White Eagle, Standing Buffalo, Standing Bear, そして、Smoke Maker といった 10 人ほどのポンカ族の指導的な酋長達の派遣団を組織し、彼と一緒にインディアン強制居住区に連れて行き、新しい保護居留区の場所を選定することであった。彼の計画では、そのあと、酋長達を Washington D.C.につれて行き、そして、土地の入れ替えを正式なものとし、残された問題をすべてはっきりとさせることであった。しかし、彼はあわてて、旅の設定でとんだへまをしてしまった。ポンカ族の酋長達は、土地を絶対に売却しないというオセージ族から冷たい待遇を受けた。彼らが、Kaw (カンザス) の保護居留地に到着するまでに、彼らは故郷に帰りたいという気持ちになり、そして、悩んでいた：彼らは、後に White Eagle がそこは、“岩だらけで、生育の悪い木ばかり”の場所だったというところで、自分達が満足するようなものは何も見ることが出来なかった。酋長達に Kemble に、自分達を故郷に戻すように頼んだが、しかし、それは、自分は、なんとしても Washington に行くことだけを考えるように命令されているのだといって、拒

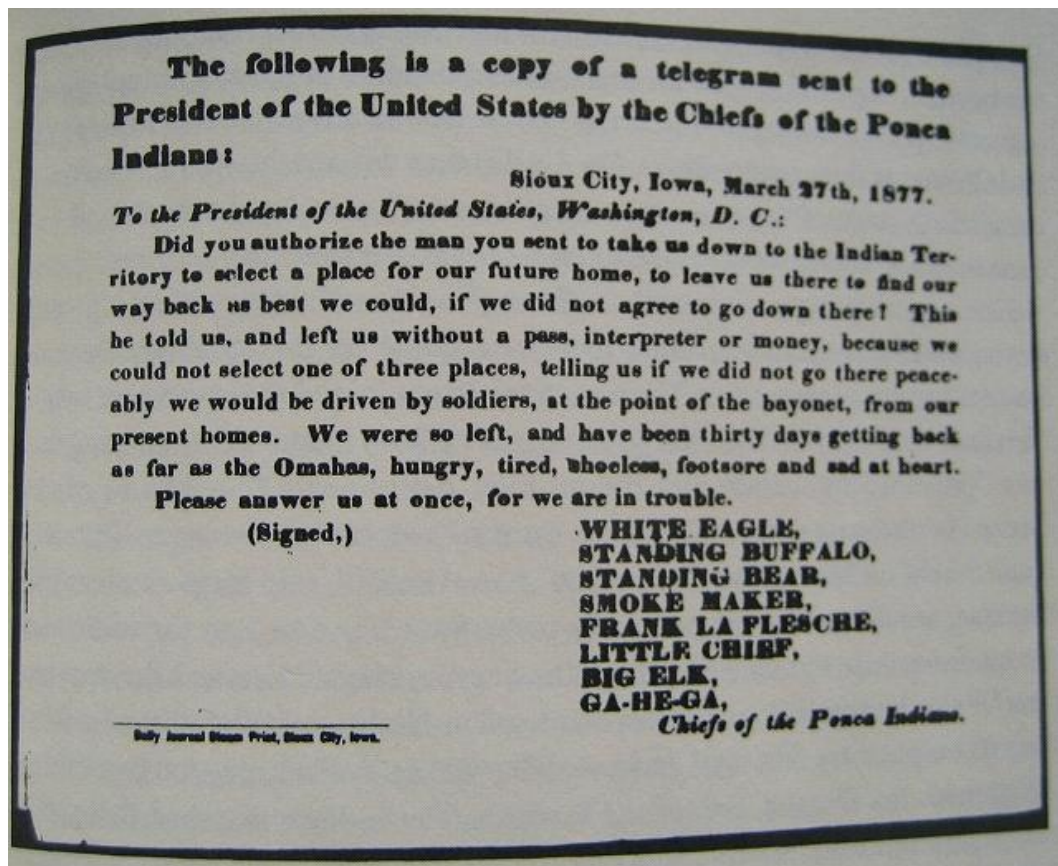


Fig. 45 ポンカ族の保護 1877年3月27日。 1876—1877にかけてのポンカ族の行政官からの書類から

Nebraska State Historical Society, RG 508 の好意による。

絶された。

その後、彼らは、問題を自分達で処理することにしたが、彼らのうちの八人（ほかの二人は、現実にもう年もとっており、Smoke Makerなどは、67歳になるところであった。）は、ネブラスカまで歩いて帰ることにした。すぐ後の上院の委員会で証人にたった Standing Bear は、この旅のための 8,000 ドルを手に入れるために彼らの極少ない所持品をどんな気持ちで売ったか、そして、彼らが、ウィチタまでの鉄道線路に沿ってどれだけモカシンを磨り減らして歩いてきたか、枯れ草の納屋のなかで眠り、乾燥したトウモロコシを食べて生き延びて来たかを話した。彼らは、50日間かかって、オトエ族の保護居留区に辿り着き、ここで、残りの行程のための食料と馬をもらった。そして、五日後に、オマハ族の保護居留区に戻ってきた。3月の27日に、Sioux Cityで、疲れきり、そして、腹を立てていた酋長達は、大統領の Hayes に、Kemble が公式な命令によって行動したのかどうかを確認する電報を打った。が、返事は何もこなかった。一方、Kemble は、酋長達こそ、“彼らが、彼らの行政官の命令に従順に従うような態度を示すまで”拘束されるべきだと

毒づいていた。⁷²

酋長達が、オマハ族の保護居留区で、この二ヶ月間の苦難から立ち直っている間に、Kemble は、急いで Niobrara に戻ってきて、直ぐに、そして、強引に、追い立ての準備に取り掛かった。40 小隊が、Fort Randall から彼のところに派遣されてきた。Kemble は、ポンカ族は、ここに残る者と、転居することを望んでいる混血の者たちも含め、“比較的文明化された集団”と一緒に、新しい土地に行く者と共に、分けることを主張した。オマハ族の男でこの事件の目撃者でもある John Springer は、それは、まったく違う状況だったと認識していた：インディアンたちの誰もここを退去したいとは思っていなかったし、彼らは、自分達の小屋に閉じこもり、そして、夜の間中、泣き叫んでいた。酋長達が、インディアン強制居住区はまったく自分達の満足するところではないといいながらオマハ族の保護居留区から戻ってきたときに、Kemble は、彼らに対して、彼らが自分の言うことに従わないのなら銃殺されるぞと話した。彼の行動に対してもっとも批判的な二人の酋長、Standing Bear と彼の弟の Big Snake は、逮捕され、そして、Yankton で留置された。圧力と、脅しをかけて Kemble は、主として混血のもの達であったが、170 人のポンカ族に行政官の区域にある彼らの小屋を引き上げるように説得した。4 月の 11 日に、彼らは、ポンカ族にはあまりにもはっきりと認識された“死んだ区域”への旅への第一歩となった、まだ氷の張っている Niobrara の川を渡っていった。⁷³

極わずかの持ち物を持った集団は、雨と雪のなか、一日わずか 11 マイルという行程で行進し、1877 年の 6 月 12 日に、Quapaw 族の保護居留区の北に地域にある彼らの新しい定住地に辿り着いた。残りのポンカ族のものが、7 月の 9 日に彼らに合流した。彼らは、彼らを移動させようという政府の努力に対して、インディアン強制居住区の“不健康な不吉な空気な地域における病気による死よりも、・・・・・・彼ら自身の健康上の問題で死ぬか生きるかということを望んでいる”とあって、頑なにこれを拒絶していた。しかし、5 月の 15 日に開かれた議会で、新しい行政官の E.A. Howard は、彼らに対して、のっけから、彼らは、“おとなしく行くか、あるいは、強制されて行くか”のどちらかだと言い、さらに補充の小隊を Fort Randall から送り込んだ。これに続いて、兵士達はおよそ 500 人のポンカ族を、悪夢の 54 日間の旅の始まりである増水した Niobrara 川の渡川をさせていた。(fig. 43) 少なくとも 30 人ほどのポンカ族のものが、オマハ族や、サンター族、そして、ヤンクトン族などの庇護のもとにこの退去から逃れることが出来た。インディアン達の行進は、ほとんどひっきりなしに降り続く雨の条件の中で、Howard が、“すさまじいほど悪い”道をたどっていった。彼らは、旅の終わりの直前で数日間、ぬかるみにはまってしまった。彼らのテントを吹き飛ばし、人々を 300 ヤードも巻き上げてしまうほどの竜巻をはじめ、強烈な雷雨に襲われ、これがそれまでの苦難に加わり、彼らには、それがまるで克服しなければならぬ試練かとも思い込ませるかのようなものであった。かれらは、5 月の 19 日に最初に死んだ子供を、彼らの故郷からまだほんの 20 マイルも離れていない場所に埋葬した。そして、Standing Bear の娘の Prairie Flower が、6 月の 5 日に死んだ。彼らが、インデ

インディアンの強制居住区に到達するまでに、9人のポンカ族―彼らは、全部、子供か女達であった―が亡くなった。⁷⁴

彼らは、ほかのポンカ族の集団が **Quapaw** 保護居留区の代理人区域の南側にキャンプをしているのを見つけた。(**fig.43**) 彼らは、北側でキャンプを張っており、こうした二つのポンカ族の集団はこれまでもよくお互いに恨みあっていたように思われる。彼らが到着しても、大事な準備はなされていなかった；彼らは、その後も、一年間の間穴の開いた覆いのティビーで生活を強いられたようだ。彼らの以前に住んでいた保護居留区が売却されずにいたのと、8,000 ドルの年金と、退去のための手当て 40,000 ドル(1878 年には、さらに 15,000 ドルの追加がなされていた) が、この移住のために費やされていた。ポンカ族は、それ以後、1881 年まで、一銭も支払いを受けることが無かったと思われる。政府は、経費が必要なときのための支援の用意をしてはいたが、しかし、ポンカ族は、彼らを不安にさせる程度の支援では死人が出始めていた。流行性の風邪、腺病、赤痢、そして、とりわけ、マラリアなどが、この地特有の病気であった。マラリアは、治療することができたはずであるが、しかし、行政官はキニーネを手にする基金が十分でなかった。ポンカ族が非常用の特別な支援の証書を手にするために、彼らの死を知られないようにしていたので、この絶滅寸前の状態でどれだけの人たちが亡くなったかを知ることは難しい。しかし、どんなに少なく見積もっても、このインディアン強制居住区での一年間の間に 45 人のポンカ族がなくなっていた。この中には、**Standing Bear** の息子、そして、**White Eagle** の妻や 4 人の子供たち、そして、年取った **Smoke-Maker** の家族全員が含まれていた。⁷⁵

1887 年の 8 月の 7 日と、そして、8 月の 23 日にもう一度、ポンカ族は会議に集まり、そして、**Niobrara** の彼らの故郷に戻してくれるように嘆願した。これは、**Spotted Tail** のダコタ族が、**White River** の川沿いにあるかれらのもっと馴染みのある土地に向かい、200 マイルほど引き上げる前に、一時的にポンカ族の行政区域にほんのわずかの間滞留していただけであるので、実行可能なものであった。しかし、**Hayt** 長官は、自分には、“インディアンの強制居住区からインディアンを元の土地に戻すことは、まったくおろかなこと” だと思われるというて、この願いを跳ね除けた。上院の調査が明らかにしたように、このとき政府が心配していたことは、かれらとは別の、まだ再配置されていないインディアンたちが、彼らと同じような行動をとる、その前例になるのではないかということであった。⁷⁶

1877 年の秋から冬にかけて、ポンカ族には、亡くなるものが後を絶たなかった。家族全員が死んだ：子供たちは病気になり、その日のうちに死んでしまった；彼らはあまりにも次々に亡くなるので、死体を埋葬する時間さえなく、大平原に持っていかれ、そのまま放置されていた。1878 年の初めまでに、恐怖と失望が、怒りを抱かせるようになった。彼らの行政官である **A.G.Boone** は、彼らは、すでに、“落ち着きがなく”、“無礼そのもので”、そして、“破壊的” だと報告していた。かれらは、カンザ族の行政区域の丁度西側に当る **Salt Fork River** の川沿いを新しい保護居住区として選択したが、しかし、彼らがそこに移住するための資金は何も無かった。1 月 29 日の議会で、**Smoke Maker** が、自分達はもとの故

郷で、どれだけのストーブを、そして、鋤を持ち、そして、“コーヒーを飲むときには、たっぷりミルク”を入れていたかを、そして、いま、ここでは、自分達は何も手元に無いと話した。Boone は、彼らに、政府が彼らを移動させる準備が出来るまで今いるここに留まっていなければならないと話していた。⁷⁷

3月の遅くになり、Salt Fork River (fig.43) の保護居留区に向けて 380 人のポンカ族が移動を始めた。6月の議会で、ようやく彼らが移動できるだけの資金が承認された。(45,000 ドル) こうして、公式的な移住が実施されたのは、行政官の Whiteman (このとき、Boone はすでに解雇されていた。) が、残されたポンカ族の者たちを、100° F という猛暑のもと、185 マイルの道を新しい彼らの定住地に引き連れていった、7月の終わりであった。その場所は確かに良好であった；その保護居留区となった場所は、ネブラスカのインディアンたちがインディアン強制居住区のなかで再配置された場所としては、どこにも劣らない最高のところであった。水は豊富にあり、土地は肥沃で、さらに、カンザス州に入植した人たちにより切り倒されていることもあったが、しかし、樹木は十分に茂っていた。穀物を作付けするには季節が遅すぎたが、彼らは政府からの支援で、(死んだものがいなかったというわけではないが、) 何とか暮らすことが出来た。1787 年の 7 月から 1789 年の 7 月までの間に、45 人のポンカ族がさらに亡くなった。そして、かれらは、依然として、Niobrara の故郷に戻ることを“強く望んでいる”ことを表明し、“偉大なる父は、自分達のことを見捨ててしまったのだ。”と、後悔していた。⁷⁸

Standing Bear と 30 人ほどのポンカ族のもの一 9 人の男たちと、残りは女・子供であった一が、自分達でその年の冬に故郷に戻ると決心した。かれらは、なんと、この旅のために、密かに、その前の数ヶ月間、支援金を蓄えて準備をしていた。Whiteman が、この彼らの計画に気づき、彼らの動きを監視していたが、しかし、かれは、彼らが雪と雨の多い時期にここを出発するとは考えてもいなかった。1879 年の 1 月 1 日に、逃亡者達は、4 つの幌馬車にのり、そして、一日、一ドルで食いつなぎ、入植者達の善意もあり、彼らは旅立っていった。Standing Bear は、Ponca Creek と Niobrara 川の間慣れ親しんだ土地に埋葬するために彼の死んだ息子の骨を携えて行った。彼は、この帰郷は、彼の仲間達からの完全なる逃亡であり、これは、生き残るためにどうしてもしなくてはならなかった逃避であると考えていた。彼らは、3 月の半ばにオマハ族の保護居留区に辿り着き、そこで、彼らの友人から、土地とそして、農業に必要な器具を与えられた。このときと同じくして、Smoke Maker と、かれの家族で生存していたものたちは、Yankton の行政官のところに行き、そこに住むことを願い出ていた。⁷⁹

この時点で政府が再び介入してきた。同情的な George Crook 将軍に率いられた連邦軍が、インディアンの強制居住区に戻そうということで、Standing Bear と彼の随伴者達を拘束した。しかし、ポンカ族の状況は、二人の著名な法律家、A.J.Poppleton と John L. Webster が Standing Bear に彼の裁判を提訴するのを促すような人身保護礼状の書簡をしっかりと管理するようにさせるほどに一般大衆の気持ちを捕らえていた。⁸⁰ その書簡は、とりわけ、

Standing Bear と彼の随伴者達は、ポンカ族から離反していたもので、彼らが拘束されたときには、政府の支援も得ずに“白人達と同じように”生活していこうとしているのだということを説明していた。その書簡に書かれていた帰郷の声明は、自分達の保護居留区に戻されるべき裏切り者のポンカ族がいるということに言及していた。オマハの地方裁判所で聞かされた *Standing Bear v Crook* の広く公にされた裁判では、明らかに好意的な Elmer Dundy 判事は、インディアンは、まさしく“人間”であり、そして、彼らの土地を望む権利があるということを明確にしたその書簡を受け入れた。Dundy は、さらに、Standing Bear は、彼の権利において、ポンカ族から離脱すること、そして、合衆国は、かれをインディアンの強制居住区に連れ戻すなんらの権威も有していないということを明らかにした。Dundy はさらに、Standing Bear がいかなる拘束からも縛られないことを命令した。上級裁判所への上訴は何一つ受け入れられなかった。

こうして、初期のメディアのヒーローとなった Standing Bear は、オマハ族の新聞記者であり、また、再建者でもあった Henty Tibbles とともにインディアン社会の再構築の手助けをして回りながら、合衆国の東部地域をも訪問していた。1879 年の秋に、彼が面倒を見ていた、逃れてきたポンカ族の集団とともにもとの保護居留区に定住をした。1880 年の秋までに、ちょうど百人ちょつとのポンカ族の者たち(おそらくこれは、全体のポンカ族の 1/6 に相当する数)は、Niobrara 川の同じ名前前の町から少し上流にさかのぼった、反対側の川岸にある三日月形をしたところや、あるいは、川の中州に家を建てていた。(fig. 44) ⁸¹

こうした状況のもとで、ポンカ族の社会は 1880 年までに、二つの集団に分かれ、もはや取り返しのつかない状況となった：つまり、北部ポンカ族と南部ポンカ族に分かれたのだ。インディアン強制居住区では、ポンカ族は彼らの新しい保護居住区へと甘んじさせられていった。彼らの新しい行政官である William Whiting は、彼らの気質を“定住しない”者たちと述べ、そして、ほかの 5 家族の者たちが北を目指して旅立っていった。しかし、10 月までに、ポンカ族の指導者達は、インディアン強制居住区に残ることを決断した：“われわれの部族は、最終的にはここに定住させられるつもりはない”、と言い、その理由を Trowbridge 長官に対する嘆願書のなかで、“われわれが、今の保護居留区に対して権利を取得するまで、そして、われわれが自分達のダコタの土地に対してあらゆる権利を放棄するまで”と述べていた。12 月に、White Eagle に率いられた酋長達が、Washington D.C. の Carl Schurz 内務長官に面会し、そして、彼らの新しい Salt Fork River の地に村を作り、そこに残る意思を表明した。Bear Scar がそのことを簡潔に言い表していた：“私は、ここに大きな石をすえた。そして、これからはその石の上に座るつもりだ。” 彼らは、インディアンの強制居住区に来ることを望んでいたわけではなかったが、しかし、かれらはもはや、ここを立ち去る気持ちはなかったのだ。さらに、彼らは、自分達がここにいるほうが、所有権を争っている Great Sioux の保護居留区よりも、土地の権利を取得する機会があると信じていたのだ。 ⁸²

政府の委員会の委員がポンカ族の酋長達と一緒に 1881 年の 1 月 3 日にインディアン強

制居住区に戻ってきて、ここに残ることを望んでいた残りの者たちからの確認を取り付けた。委員達、ならびにポンカ族の派遣団は、その後、こうした合意が古い保護居留区の売却に繋がるかどうかを確認するために Niobrara に向かった。

彼らは、1881 年の 1 月 11,12 日に、Niobrara の町に集合したが、ポンカ族の二つの集団は友好的ではあったが、部屋の反対側に座っていた。50 人以上のこの辺地に入植した人々もまたそこに参加していた。Smoke Maker 老人は、彼らがまるで、“解体処理をされるために牧場につれてゆかれる牛”のようにインディアンの強制居住区につれて行かれたことを思い起こしていた。Standing Bear は、南部ポンカ族の者たちは、彼らの Niobrara の土地を売却するどんな権利も持っていないと言いながら、“激しい演説”をした。彼は、いまや、178 人のポンカ族が、政府からの何の援助もなしに自立していることを説明した。彼らは、自分たちが年金を管理することを望み、そして、“電灯が煌煌と”照らす、“白人達の家”を臨んでいた。そして、彼らはまた、彼らの土地への永住権の保障を求めている。投票が行われたとき、インディアンは強制居住区に戻ること、あるいは、彼らの昔の保護居留区の土地を売却することに賛成した北部のポンカ族は、ひとつの集団ではなかった。⁸³ ポンカ族の分裂はもはや明白であった。そして、政府は、いまや最近のあまりにも利きすぎた施策に自己反省をしながらも、それを認めようとしていた。

北部ポンカ族が、彼らが改めて手に入れた土地に留まるという過程が、Oglala 族の酋長達と、Brule 族、そして、Standing Rock Dakota が、ポンカ族が、“彼らが以前からすんでいた……土地”の所有権を認めた、1881 年の 8 月 20 日に明確にされた。⁸⁴ この条項は、Great Sioux 保護居留区をそれぞれのダコタ族の分属に、土地の分配が究極の課題であるとして、分割するもっと大きな施策の一部であった。こうして北部のポンカ族は、それぞれの家族は 640 エーカーを、そして、独身成人は一人当たり 80 エーカーを取得した。

しかしながら、彼らが分配を受け取る以前に、これとは異なる時代となった。1881 年の合意は、ダコタの分属それぞれに属している成人男性の 3/4 が、この条項に賛成しなければならないことが、条件としてついていたが、しかし、このことは実際にはとても難しい問題であった。分配の仕事は遅れたが、しかし、ダコタ族の襲撃は、もはやなくなり、ポンカ族は、襲撃が再開されたのはそれから二十年くらいたってからのことであるが、それまでは Niobrara の保護居留区で安全に過ごすことができた。

ポンカ族の分かれた両方の集団ともに、1881 年以降は政府から、しっかりとした支援を受けることができ、南のポンカ族の集団は、最終的には、法的基準に従い購入した保護居留区を手にする事ができた。1881 年の 3 月の条項では、ポンカ族の資産の損失に対して、そして、彼らが新しい故郷にもっと快適に定住するための費用として、総額で \$165,000 ドルの補償が承認された。この承認は、調査委員会の報告書を酷評する、直接的な結果であり、それは、“過ちを十分に、かつ、迅速に是正すること”を望むものであった。⁸⁵ 総額で、50,000 ドルが、南部のポンカ族に対して、彼らがチェロキー族から保護居留区を手に入れるために支給された。加えて、彼らは、一人当たり、10,000 ドルの支給と、牛の購

入、ならびに、家畜を育てるための資金として 10,000 ドルが用意された。北部のポンカ族も同じように、農業支援という名目で、5,000 ドルと、教育のための費用として 5,000 ドルに加え、一人あたり 10,000 ドルが支給された。残りの 70,000 ドルは、その利子が（年率で 5 割）両方のポンカ族の個々人に対しての将来の支援のために財務省の口座に預金された。

インディアンの強制居住区では、保護居留区の条件は良かったのにも拘わらず、南部のポンカ族は、苦難にあえいでいた。彼らの人口は、まだ慣れぬ土地での生活が不安定のために、増えたり、減少したりの状況で、20 世紀に入り、息を吹き返すまでの、1900 年までは、580 から 650 人の間で平衡状態であった。酋長達、とりわけ、**Standing Buffalo** は、1890 年代に入るまで、土地の分配に対してかたくなに抵抗していた。この分配は、1890 年の 9 月 6 日に正式に受け入れられ、これに従い保護居留区が調査された。しかし、4 年が経過しても、わずかに 420 人のポンカ族がこの土地の分配を受け入れただけで、残りのもの達、特に年寄り達は、なおも、これに関与することを拒絶していた。そして、最終的には、1894 年の 8 月 24 日になり、インディアン事項の取り扱い長官が残りの土地の分配を認めるように指示した。合計で、101,051 エーカーの土地が、分配され、後には売却する土地は何も残らなかった。⁸⁶

こうして分配が行われ、そして、それに関連して共同社会の形態は分割されていったにもかかわらず、南部のポンカ族は、彼らの行政官はそれを維持することを抑制しようとしたけれども、たとえば、**Sun Dance** の催しをするなど、沢山の伝統的な習慣を守り続けていた。と同時に彼らは、**Peyote** 教とか、**Ghost Dance** といったほかの部族の儀式も、自分たちの社会の中に取り入れていた。しかしながら、忘れてしまったものに彼らの伝統の歴史があった。あの慣れ親しんだ、**Niobrara** の故郷の景色なしに、彼らの物語は、その文脈を無意味なものにしてしまうし、年寄りたちが死んでしまうと、その物語は消えてしまったのだ。⁸⁷

北部のポンカ族は、**Niobrara** の湾曲した地域の小さな場所で、1880 年代は繁栄を続けていた。彼らは、行政官の報告書の中では、“誠実な生活をしており”、そして、“非常にうまくやっている”と書かれているように、いつも決まって好意的に報告されていた。⁸⁸ 1855 年の収穫は、とても多く、**Standing Bear** は、政府はさらに保管用の入れ物、もしくは、倉庫を用意するように強く申し入れるなど、あまった穀物を自分達の家蓄えているようにしていた。彼らは、**Santee** の行政官に付属した支配人に指示されて、1866 年までは、鍛冶屋や大工達の店に連結した倉庫や、彼らのところの副行政官の家などにこれを当てていた。彼らの人口は、1888 年には、200 人を超えた。その 1/4 以上は、混血のもの達で、これは、多分、この地域をかたくなに去らずにいた、ここ本来の混血の時代の人たちとの融合の表れではないかと思われる。ポンカ族の歴史家の間では、**Standing Bear** が人口を拡大するために、そして、彼らの保護居留区での発言権を増すために、仕切りに他部族との結婚を促していたとさえ言われている。非常に多いこうした他部族との結婚の結果とし



Fig. 46 Standing Bear とその家族 1870 年ごろ

Nebraska State Historical Society, 1397: 1・2 の好意による。

て、そして、彼らの数が相対的には少なく、また、方々に散り散りになっていたので、北部のポンカ族は、南部のポンカ族よりもずっと早く、“市民服”や、アメリカ的な生活様式に適合して行った。しかしながら、オマハ族、ヤンクトン族、さらには、サンテ族などを訪問し、儀式やお祝いを執り行うなど、伝統的な行事の遂行をかたくなに守っていた。

1889 年の 3 月 2 日に、政府は、最終的に Great Sioux 保護居留区の分割を確実なものに

し、北部ポンカ族に対する土地の分配についての道を開いた。彼らは、このことにあまり熱心ではなかったが、多分、そこが彼らの最後の保護居留区、彼らがそこに留まるために厳しい戦いをしてきた保護居留区だということを意味していたからである。Standing Bear、彼は、一歩引き下がり、奇妙な態度を示していたが、彼は、1890 年の春には、インディアンの強制居住区に向けて、ほかの 60 人の者たちと一緒にここを去っていた。Standing Bear も含めて、少なくとも彼らの半分は、7 月にはまた戻ってきて、そして、彼らの土地を受け入れていた。

1891 年までに、合計で、27,202 エーカーの土地が、167 家族の長と、そして、それぞれ独身の成人に対し、320-, 160-. 80-エーカーの広さに分割されて分配された。例により政府は、入植者達にすぐに、しかも全部が買いとられるのを防ぐために、25 年間の契約期間の間は、分配地の権利を保持するようにしていた。ポンカ族は、自分達の土地として、主に、彼らの長い間の心の故郷であった肥沃な川の河岸大地と、Niobrara 川と、Pont Creek との間の台地を選択した。Standing Bear は、自分の家族の分配地として行政官のいる場所の近くの Niobrara の地を選んだ。(fig. 44 ならびに 46) 彼は、そこに、1908 年に亡くなるまで住んでいて、彼の先祖の眠る一角に埋葬された。⁸⁹

ポンカ族の 96,000 エーカーもの保護居留区を思い出させてくれるようなポンカ族の題目は消えついてしまった。1889 年の協約の中の項目では、土地は、最初の三年間の間は、エーカーあたり、\$1.25 で売却されていたが、そのあとは、なんとエーカーあたり 25 ¢ という価格で売られていた。土地のほとんどは、1892 年から 93 年の間に入植者たちの手に渡ったが、こうした権利の多くが、わずか一年の間の登記の間に(これは、この期間は何の支払いも必要なかった。)、土地投機家の手に渡ったのは、この時期、投機の意欲がものすごいものであったことを示している。契約による拘束の期間が切れると、(後の法律制定で省略された)、そして、北部のポンカ族が彼らの所有権を手にとると、土地は、たちまちのうちに、アメリカ人の手に渡ってしまった。1939 年までには、1028 エーカーの土地がポンカ族の管理下にある土地とし残っただけであった。それまでの過去と同じように、貧困によりインディアンたちは、いまや、その土地が個人のものとなっていたので、部族全体のためにはではなく、自分達の一時しのぎの金を手にするために、自分達の基本的な財産である土地を売却していた。ポンカ族は、おもに、ネブラスカやサウス・ダコタに散り散りに生活するようになった。1962 年の 9 月 5 日に、インディアンの社会に対する見直された政府の果敢な施策の間に、彼らは、部族としての“終焉”を迎えた。⁹⁰ しかしながら、これは、この意気軒昂な人たちの終わりではなかった。

分裂をされたが、征服されたわけではなかった

オトエーミズーリ族は、1876 年と 1881 年に、Big Blue 川沿いの彼らの希望がかなえられなかったエデンの園を売却し、インディアンの強制居住区へと、まさに、際限なく分

裂された人々のごとく移住していった。彼らの退去については、ポウニー族やポンカ族たちがネブラスカでの最終的な時期に味わったような劇的な話とか悲劇は無かった；オトエーミズーリ族には、それは、もっと抵抗力の低下とか、貧困、さらには、彼らの退去を止むを得ないものにさせていた内部的な問題、外的な圧力などが相互にかみ合った複雑な事情からくるものであった。事実、彼らのうちのあるものたちにとっては、この退去というものは、押し付けられたものというよりも、もっとずっと、逃避的なもののように思われた。しかしながら、その結果というものは、ポウニー族やポンカ族と同じようなものであった：インディアン強制居住区での貧しい暮らし、部族が消滅する危険まで落ちた人口、そして、彼らのネブラスカの以前の保護居留区は、インディアンたちが放棄した土地に投資をしようというアメリカ人に売られた状態であった。

1870年代を通して、そして、彼らがインディアンの強制居住区に定住したあともなお、オトエーミズーリ族は、彼らの持っていた主要な伝統というものを残していた。仕事熱心であった彼らのウェーカー教徒の行政官、Jesse Griest（彼は、1873年の4月にAlbert Greenからその職を引き継いでいた。）によれば、彼らは、政府の同化政策に対して“頑なに異議を唱えて”、そして、自分たちの“先祖からの伝統というものに固執する姿勢”を貫いていた。彼らは、彼ら自身の医者に依存し、アメリカ人的な治療を回避していた。と同時に、彼らは、男達を農業の従事者に変えようという試みに抵抗し、そして、そうした考え方に供応しようとするものには“烙印”を押していた。依然として、彼らの昔からの土作りの家やティピーに住み、その土作りの家にはどこも、その家族の神聖なる菓の包みが保持されていた。1879年になっても、この保護居留区でインディアンたちが住んでいた木造の建物は、わずかに9軒しかなかったほどであった。（そのインディアンたちのほとんどは混血であった。）1875年には、目を見張るような、そして、非常に費用のかかった手作りの学校が開校したが、しかし、だいたい100人ほど居た就学適齢期の子供たちのうちのわずかに20人足らずの者が、ここに通っただけだった。パイプの踊りとか、持ち主が死んだときには、馬をその墓に生贄にするといったような由緒ある行事が、何とかこれに圧力をかけてやめさせようという行政官の努力にもかかわらず、依然として行われていた。Griestは、新しく建てられた家はその板をはがされ、壊されたあと、そして、新しく野原になったところが雑草で埋まっていくのを見たとき、オトエーミズーリ族は、単純に、“彼らは、自分達の祖先の自由闊達であった生活に戻ることが出来るかもしれないという望みをあきらめたくは無い”だけだと認めざるを得なかった。⁹¹

あるものたちは、ほかの人たちよりも熱心にこの望みを捨てきれずに居た。オトエーミズーリ族は、18730年代の後半以来、分派主義により分裂されてきていたが、しかし、1870年以後は、合い争う支持者層の間の溝がよりはっきりとなってきた。最初の集団は、— “落ち着いたある分派”、Griestは、彼らをこのように呼んでいた—、少なくとも市民化政策に対して、口先でうまく同調しており、彼らのネブラスカの土地の一部に残ることを保証された。Griestは、その元を作った酋長（Big Elkあるいは、Harre-garrowに、目

指された) の権威を、彼らの集団の中の若いものとしての地位から、権力に抵抗している世襲的な指導者の地位にまで高めようという考えを擁護していた。二番目の集団は、**Griest** に、“野蛮な集団”と名づけられていたが、行政官とかれの方針からは蔑まされており、彼等の胸の内にあった究極の目標は、自分たちの全部の保護居留区を売り切り、そして、インディアン人の強制居住区に移り住むことであった。ポウニー族と同じように彼等は、そこで彼等の旧来のやり方で生活してゆけるものと誤って思い込んでいた。勿論、彼等はこうした中で、周囲の入植者達から心からの支援を受けていた。**Griest** は、こうした反抗的なインディアン達は、全体からすれば、1/4 か、1/3 程度以上のものではないと考え、彼等を主流派ではないと見ていたが、しかし、彼の上司に対して、クウェーカー教徒の政策が有効に働いていると示そうと、このことに注目をしていた。インディアン人の強制居住区への移住が、1880 年から 1881 年に、最終的に実施されたときに、彼等の社会がほぼ同数の大きさの二つの集団に分かれてキャンプをはるという形でこの問題が現実なものになった。さらに、こうした反抗的なインディアン達は、自分たちの背景に伝統を背負うという重責を持っており、そして、**Medicine Horse** や **Ar-ka-ke-ta** のような力を持った世襲的な酋長の指導力があつたので、彼等は、勢力はその数以上のものを持っていた。この両者の集団の間の敵対意識は、かなりのものであつて、お互いに犯罪を起こすまでになっていた：1874 年には、たとえば、ある 1 人の男が、穀物を植えようと平原を開拓していると嘲って自分の友人を殺してしまうという事件が起こった。⁹²

この敵対心は、1870 年代にオトエーミズーリ族をもつれさせていた圧力により増大されていった。最初の圧迫は貧困であつた。彼等の生活の基盤は、ずたずたにされていた。この時代には、一世代の間に農耕地が増えるということは殆どなかった。自分たちの保護居留区に住むことができるかどうかともわからないような状態で、その居留区を良くしようということに一体どんな努力の意思を持てというのだろうか？ 何度も種まきされた穀物は、（たとえば、1873、1874、そして、1879 年と）干ばつやバッタの大群の被害を被つた。本来、こうした土地は肥沃であつたにもかかわらず、彼等が、トウモロコシの収穫 5,000 ブッシェル以上、もしくは、小麦、1,000 ブッシェル以上の収穫を得た年はごく稀であつた。

彼等のバイソンの狩猟は、この時代の中ごろには姿を消していた。オトエーミズーリ族は、それに代わるものが乏しいか、或いは、生活を維持していくためには非常に高い配給が必要と言うことで、1875 年までは、一年に一度の狩猟は許可されていた。**Griest** は、このことを引き出すために、インディアン人の懸案にかかわる長官から特別な許可を得なければならなかった。彼等が実施した狩猟で最後に首尾よくいったのは、1872 年の夏の狩であつた。彼らは、1875 年の夏に、男と、女、さらに子供も含め 340 人ほどの最後の組織的な狩を編成し、入植地を通りぬけ、**Little Blue** 川を遡り、そして、共有地に下がって行き、あるいは、時には、**Saline** 川の源流の辺りまで出かけて行つた。（fig. 43）しかしながら、この時には、バイソンの大群は、はるかかなたにいて、これを見つけることができず、このため、入植者達とのいざこざが絶えず、狩にでかけた旅の努力は実らなかった。これと

同じ年に政府は、“極貧状態の”オトエーミズーリ族に対して、12,000 ドルの緊急援助を支給した。このお金の殆どは、配給のためと、大きな牛の群れ(308 頭)を購入するために使われた。1877 年まで、飢餓状態にあったインディアン達は、この牛の殆どを食べつくしてしまった。そして、1880 年までに、再度、牛の群れが準備されたが、しかし、これは単に Griest が、比較的懐柔されたインディアン達に対する警察力を維持するために、それを組織的なものにしようというものであったに過ぎない。⁹³

年金による十分な支援もなかったし、また、彼等の所有していた以前からの土地に対する減額された支払いもなかった。年金の支払いは、いまや、9,000 ドル程度になっていたし、その殆どは、管理の改善(1879 年に建設された牢獄なども含め)、ならびに、農業支援ということで、行政官に使われてしまった。インディアン達が受け取ったのは、1873 年には、2 年に一度の割合で、1 人あたり 3.5 ドル(酋長は、4.0 ドル) に過ぎなかった：そして、1875 年以降は、現金の支払いは一切なかった。彼等は、取引業者たちが、2500 ドルもの金を溜め込んでいるとの疑惑をもった。飢餓状態が切迫し、配給が滞ると、また、インディアン達の基金からの取り崩しが行われた。疑いもなく、酋長達は、Griest に対して、“自分たちの金はどうなるのか” と、問いただしていた。事實は、彼等のお金は全部で、1875 年以後も、7000 ドルはあったはずであるが、これが行政官のところの膨れ上がった雇い人達の仲間の懐に消えていった。こうした、先生や、農業従事者、鍛冶屋、そして、そのほかの使用人たちに対する特別の基金は、1865 年にはなくなっていた。極僅かではあるが、手元にあったのは、1872 年と 1879 年に鉄道の線路のかかる部分に対する権利を売却した、その収入と、アメリカ人の狩猟者たちのためにやっていた毛皮や皮革の加工の手間賃だけであったが、しかし、こうした金は飢餓状態を水際で防ぐのがやっとであったに過ぎない。

94

この時代におけるオトエーミズーリ族の人口の状況は、正に限界に近い状態の、活気なかったことを反映していた。彼等はポンカ族やポウニー族のような急激な崩壊を経験することはなかった；それは、人口統計上の破壊の原因となるような彼等の保護居留区に対する襲撃や、狩猟に出かけた集団に対する Brule 族は襲撃がなかったからである。こうした襲撃が終了していたのは、人口の統計で男性と女性の数のバランスが取れている状態からも伺い知ることが出来る。オトエーミズーリ族はネブラスカにいる時にその数が最低の状態で 434 人であったが、この数あたりで人口が増えたり(30 人以上になることはなかった)、減ったりしていた。この間で、彼等の人口は彼等の逆境が改善されたり、或いは、深刻になったりしたその年々で、増えたり、減ったりしていたのだ。この 10 年くらいの間の前半は、死んだ人数が、生まれてくる赤ん坊の数より多かった。死んだ原因は、マラリア、腸チフス、ジフテリアや、脱水状態から来る胃腸の疾患によるものが殆どであった。ここでも他と同じように、子供達の死亡が異常に多かった。平均して、3 人から 4 人の大人と子供という小さな家族の規模が、子供達の高い死亡率と、おそらく、出生率の減少の証拠であった。そして、最も深刻な人口の減少が、1880 年にやって来た。この年には、とりわけ

厳しい干ばつの夏で、小川という小川がすべて干上がり、そして、“だれ彼となく” 子供と大人が、よどんだ水たまりの水を飲んで病気になったのだ。⁹⁵

こうした貧困に加えて、二つ目の圧力は、日増しに強くなっていく連邦政府の政策の強制的なやり方と、それに結びついたオトエーミズーリ族の彼等自身の出来事処理する能力の欠如であった。ネブラスカにもともと住んでいたほかのインディアン達と同じように、オトエーミズーリ族は、パス法という、身分証明書携行の厳しい義務付けの対象になっていたし、また、この監禁状態が、当時の自由になったインディアン達を馬鹿にしていた。彼等は、また、**Griest** の“説得力のある、もしくは、強制的なやり方”、たとえば、学校に行っていない子供たちの家族から脅迫的に小麦粉の配給を保留したり、子供達に只で給食を与えたりするなどの誘いをかけるといったような方法で、手工業の訓練校に通わせるという目標の対象にもなっていた。しかし、こうした議論の主たる論点は、1873 年に為された、現金での年金支給を停止し、すべての基金を農業支援のために当て、賃金の得るために働くようにするという、行政長官の決定であった。⁹⁶ 努力の結果、インディアン達は、すでに彼等のものであった資金の算定がなされて、この支払いが行われたのであろう。このことが、**Washington D.C.**での世襲酋長達と、行政長官である **Edward Smith** との間での熱烈な対立を引き起こした。

Medicine Horse, Ar-ka-ke-ta そして、**Big Bear** を含んだ酋長達の代表団が、**Griest** に付き添われて、1873 年の 10 月に首都を訪問した。彼等は、この旅のために、彼等の年金の中から、15,000 ドルを捻出し、支払いをした。そして、10 月の 1 日と 4 日に議会で **Smith** と対面し、彼らが自分たちの保護居留区のすべてを売却し、インディアンの強制居留区に移住する計画を説明した。一方、**Smith** は、この計画に対して、それが、彼らの分配地への移住を遅らせることに主眼を置いたものであると（多分、それが正しかったかもしれないが、）理解して、何も行動をとらなかった。その後、この議論は、だれがオトエーミズーリ族の基金を管理しているのかという問題に発展した。**Medicine Horse** は、オトエーミズーリ族は彼等自身の土地を売却し、そして、その代金を、現金で受け取る権利があると主張した。“それは、誤解だよ” と、**Smith** が返事をし、そして、1854 年の協定の項目を引き合いに出して、彼の論拠の裏づけをした。そして、さらに、**Smith** は、政府は、“自分の子供達の面倒を見る” 責任が在ると付け加えた。これに対して **Medicine Horse** は、“その子供達は、今、正に、痛めつけられ野たれ死ぬほどまでになっている。”と報告した。**Ar-ka-ke-ta** は、**Griest** が彼を冷静にさせようとしていたにもかかわらず、決して黙ってはおらず、白人達が、つい最近まではインディアン達の土地であった肥沃な土地を自分たちだけが所有し、一方、彼等、オトエーミズーリ族のものは、なぜ、貧困な状態に置かれているのはどうしてなのかという論点について尋ねた。**Smith** は、これに対して、ただ、繰り返し、“私は、君たちのお金を、君たちのため以外には、何も使ってはいない。” と言うばかりであった。そして、いたたまれなくなり、“君たちは、自分たちの身のうえに変化が来ているということを、そして、白人達が君たちに生活の仕方を教えようとしていることを理解してい

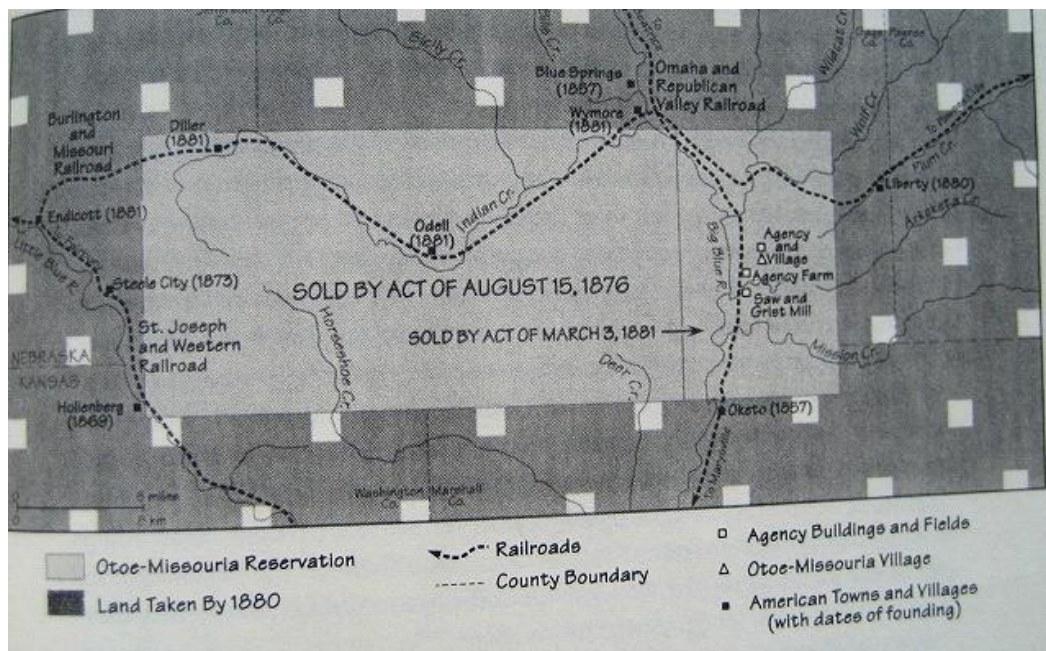


Fig. 47 オトエーミズーリ族の保護居留区とその村 1880 年頃

ないようだ。”と続けた。Big Bear、彼は、他の酋長達と同様、率直に言ってけんか腰であり、そして、“偉大なる父”ということばに対して何のためらいも持っていなかったが、こう返事をした。“あなた方は、われわれを白人にすることなどできはしない。これは、貴方達が出来ない1つのことなのだ。”と。⁹⁷

彼は言うことは正しかった；こうした酋長たちは、彼等が、“鋤に頼る”ことに賛同する以前に亡くなっていたのであろう。しかし、Smith は、農業化に余分な資金を投入し（あまり良い結果はもたらさなかったが、）、建て屋を建て、そして、賃金を支払うようなことをして、とにかく現金での年金支払いを停止することをもくろみ、これを実施した。そして、Griest を通じて、農地で一日働いて、その労賃として1ドルを払うという労働政策を開始した。1875年には、Griest は、30歳以上のもので、130人から132人もの者が賃金労働をしていたと自慢げに話をしていた。仮に、このことが正しかったとしても、このことがその後長く続いたわけではなかった。その同じ年に、上司である Barclay White が、“野外活動集団”（ここでは、人々のうちの1/3程度であると記述されていた）の人たちは、彼等のお金は自分たちの了解がなく分配されていることを理由に、どんな形の年金でもこれを受け取り、或いは、子供達を学校に入れるために労働することを拒絶していたと報告していた。彼等は、行政官の管理する土地から離れてキャンプをはり、そして、入植者達に森の木を売るなどして、Griest を激高させるようなことをして生活をしていた。そして、それは彼等をますます苦しめるものではであったが、彼らはネブラスカを離れた後でさえ、

果敢にこの抵抗を続けたのだ。一方、彼等の生活用品は、行政官の倉庫のなかに溜まっていった。そして、1878年までに彼等はすべてのインディアン達を、彼等自身のお金を得るために働かなければならないと納得させたので、最後には、少なくとも部分的には、そうしたものは、夫々のインディアンに広く配られた。しかし、なお、政府は彼等の年金を現金で支払おうとはしなかった。⁹⁸

そして、三つ目の圧力は、オトエーミズーリ族を完全に取り囲んでいた、そして、**Big Blue** 川沿いの肥沃な土地がインディアン達のために無駄にされている (**fig. 47**) と信じていた、ネブラスカやカンザスの人たちからもたらされた。入植者達との関係は、概して友好的であった；結局、インディアン達は、多くの地方での生産物や、サービスの提供に対しては縛られた状態の市場を提供していたのだ。この相互関係の悪い状態が、1871年の7月に、混血の男の **Jim Whitewater** が、2人の入植者を酔った勢いで殺害したときに起こった。重大な事態は、オトエーミズーリ族自身が、**Whitewater** を捕らえ、そして、かれを牢獄に閉じ込めるということで、やっと治まることができた。彼は、その後の18年間を州の監獄で過ごすことになった。また、よく、白人達により馬ばかりでなく、森の木の盗伐が起こった。(最もこの事件は、それが盗まれたものなのか、それとも、売却されたものかの区別をすることが難しかったが、) 意味深いことに、行政官による政策の記録によれば、1879年以後、新しくできた牢獄がインディアンでいつも満杯であったのに、白人達に対する訴訟は、いつも決まって証拠不十分により、無罪放免となっていた。⁹⁹

しかしながら、日常の友好的な交流も沢山あった。1874年の9月16日には、たとえば、オトエーミズーリ族の野球チームが、リーグの優勝をかけて **Hebron** からやって来たチームと戦っていたし、また、1873年の6月26日には、インディアン達が、**Beatrice** を訪問して、その地域の人たちと一緒にダンスをしていた。そこには、イタリア系のアメリカ人のダンスのグループもいたが、オトエーミズーリ族の人たちのほうが大きな観衆を集めていた。¹⁰⁰

しかしながら、このような紛らわしにもかかわらず、入植者達の優先的な目標は、インディアン達に対して、彼等の土地を売却させることであった。その説明をするのは決して難しいことではない。インディアンの保護居留区についての良く知られた肥沃性一協約に“ネブラスカの庭”と記述することが当たり前のことになっていた—に加えて、インディアン達の土地は、いつでも、安く手に入ると広く信じられていたのであった。1870年代の経済的な不景気のときでさえ、オトエーミズーリ族の保護居留区の周りの郡の土地の値段は、1エーカー当たり平均して6ドルから8ドルというものであった。¹⁰¹ このことは、ある意味では、投機家たちが1880年代になり、急激に価格が上昇したのだが、値段が上がってから土地をうることをもくろみ、売りしぶり、広大な土地を依然として保持していたから、土地そのものが不足していたためと説明できる。もっと、土地を拡張しようという、すでに定着していた入植者達や、開拓された土地で高い買い物をするか、或いは、隔離された辺境の地に自由な生活の場を求めるしかなかった新しく入ってきた人たちは、“利用されて

いない” オトエーミズーリ族の保護居留区の土地に篤い視線を浴びせていた。

1869 年に、行政官の **Smith** が献身的な努力をして以来、オトエーミズーリ族の保護居留区の土地を売却するという初めて重大な試みが 1872 年の 6 月、議会が保護居留区の西の地域の 80,000 エーカーを売却するための法案を通過させたときに、現実の問題となってきた。しばしば、正式な書簡の中で繰り返し述べられてきた、すでに知れ渡った理由付けは、オトエーミズーリ族は、“インディアン達のほんの僅かの人数に必要なものからすれば、ずっと……広大な保護居留区を” 保有しているというものであった。¹⁰² この部分的な売却は、オトエーミズーリ族を東の極狭い再分配地に定着させるために資金を使いたいと考えていたクェーカー教徒、ならびに、自分たちの築いた土地の活用の安全を確保しようという混血の人たち（その当時、20 人から 30 人ほど居た）、により、話が止まっていた。法案は、拡大された議会でのインディアン達の同意が必要とされ、これは、直ぐには実現しなかった。

Griest が、保護居留区の一部を残そうという積極的なキャンペーンに着手する以前の、1871 年から 1873 年にかけて、オトエーミズーリ族は、彼等の土地全部を売却し、インディアンの強制居留区に移住するようにそそのかされていた。**Green**、かれは、彼の後継者よりもずっと寛容な男であったが、インディアンの酋長達の派遣団が、オセージ族の近くの新しい保護居留区がどんなものであるかを視察するために、1872 年の春にここを訪問することを許可さえしていた。（例により、この旅の経費は、年金の支払いのなかから 200 ドルを差し引くという形で用意された。）酋長達は、自分たちの目にしたものに強い印象を受け、そして、**Green** は、直ぐに、“土地を売却して、移住することは、この部族のみんなの一致した意見だ” と、報告した。9 月に、指導的な立場の者達が、議会に集合し、自分たちは、自分たちの土地の“全部を売却するか、あるいは、何も売らないか” のどちらかだと言い張り、6 月 10 日の合意を拒絶した。こうして、この問題は、何故、行政官やインディアン局がインディアン達を行かせようとしなないのかを知りたいと要求した、入植者達の沢山の嘆願のために滞ってしまった。ある嘆願書のなかで、これは誠に不誠実とも思われるが、入植者達は、彼等は、単に“公明正大な動機により駆り立てられた” ものに過ぎないと主張していた。¹⁰³

そのあと直ぐに、彼等の政治的な代理人が、オトエーミズーリ族を移動することを“許可”する要請を取り上げた。**Phineas Hitchcock** 上院議員が 1872 年の 12 月 11 日の上院で法案を取り上げ、彼等の移住と、1 エーカーあたり、1.25 ドルで保護居留区の土地を売却すること、この価格は入植者達の気持ちを引っ掻き混ぜたに違いないものであったが、これを請求した。1873 年の 1 月になり、ネブラスカの地方議会は、保護居留区は、ネブラスカのその地域に“入植することに対して障壁を作っているような、荒れ果てた開拓されていない土地”にあると、反対した議会に対する議事録のなかで、その重要性をさらに加えた。さらに議事録のなかで、オトエーミズーリ族は、彼等の土地、すべてを売却することを望んでいると、記していた。¹⁰⁴

オトエーミズーリ族は、1872 年の後半には、一貫して、6 月 10 日の合意に対して決断を下すことを避けてきた。1873 年の 4 月 23 日に、新しく着任した Griest により、行動をとるようにとの圧力で、彼等は、集会に集まり、そして、部分的に売却するという計画に対して反対の態度を確認した。Griest は、“人々の気持ちを掴むこと”と、“白人をけなすこと”が、中間達を納得させることだと主張した。Griest は、世襲の酋長達をその立場から追いやるといって脅迫し、圧力をかけ続け、そして、ついに、1873 年の 5 月 25 日に、売却についての同意を確実なものにした。1873 年の 9 月に、77,174 エーカーの土地が、売却を当てにして、40 エーカーずつの区画に分割され、調査された。(fig. 47) しかしながら、この時には、何の見積もりもされず、また、売却されることもなかった。そして、Medicine Horse と彼の支配にある者達は、全部の土地の売却の可能性を否定するというような取り扱いに対しては、これに反対するという態度をとり続けた。¹⁰⁵

1874 年は、オトエーミズーリ族は、“興奮に溢れた”状態にあった。Griest は、西の地域の 80,000 エーカーの土地の売却は、保護居留区の東の残った地域を開拓してゆくための膨大な資金を生み出すに違いないと、沢山のインディアン達の気持ちを彼の思惑の中に引き集めた。世襲した酋長達は、Smith 長官との不満の残った面会の記憶が、なおも、気持ちの中にいやな思いをさせており、彼らは、妥協の気持ちを微塵も示さなかった。秋になって、こうした、“手に負えないオトエ族のもの”(これは、白人の性格でもあるが、)が、Medicine Horse と Pipe Stem に導かれて、カンザスの南西部でバイソンの狩をするために、Potawatomie 族に合流するつもりで、保護居留区から抜け出してしまった。指導者たちは、逮捕されて、そして、一ヶ月の間、Fort Hays の牢屋に監禁され、その間、彼の支配下の者達は、—90 人ほどのものが、彼と行動を共にしていたが—かれらは、保護居留区に強制送還された。オトエーミズーリ族は、このことに対して、国防局に対して、彼等の年金から、1,000 ドルを支払うということで、損害賠償の責任を取らされた。Griest は、処罰をすることは、言う事を聞かない者達に対して“有益な効果”をもたらすだろうと、表明した。¹⁰⁶

が、その一方で、彼等の抵抗はますます激しくなっていた。1875 年の 12 月 8 日に、すべての土地を売却するという法案が上院に、再び提案され、その法案を通すということ为前提にして、保護居留区の東の地域が測量された。この時の地方新聞によれば、法案は、その周囲の地域に住んでいた、“すべての市民の満場一致の支持”を受けた。新聞は、Greist が、入植者達の見解を“いつも、はきちがえ”、“長老や、誉れの高い酋長達を追い払い、公正さの枠の外に足を踏み入れ”、そして、インディアン達の、“20 分の 19”もの願いを無視してきたとして、彼に対する捜査を求めた。ここを去る決意をした“畑で働く集団”の人たちは、1876 年の春になっても穀物の種を蒔くことさえしなかった。¹⁰⁷

しかし、圧倒していたのは Griest であった。そして、上院で承認されたあと、移住の法案は、保護居留区の西の地域から 120,000 エーカーを部分的に売却するように政府で修正され

ていた。法案がネブラスカの上院議員の Agernon Sidney Paddock に戻されてくると、彼は、それは、オトエーミズーリ族は、再分配のために、何某かの土地を維持していればいいという“クェーカー教徒、ならびに、インディアン局の意向だ”と言って、この修正案を支持した。そして、それが、“同意をする最良の方法である”と考えた。Grant 大統領は、当初ためらいをしたが、結局、1876 年の 8 月 15 日にこの修正された法案にサインをした。

108

1876 年の合意事項の内容は、次のようなものであった；土地の評価をしたのち、その土地は、それぞれ 160 エーカーを越えない範囲で入植者達に売却されること；支払いは、Beatrice の土地管理局で、現金で支払われるか、あるいは、3 年間にわたり、6 パーセントの利子をつけて、別の形で支払われるべきこと；土地は、その評価額で売却されるべきで、どんな場合でも、1 エーカー当たり 2.50 ドル以下であること；そして、収益は、インディアンに対しての年金支払として、年間 5 パーセントの利益を確保するために合衆国財務局に預けられるべきことと言うものであった。この合意の不可思議な内容のなかで、表向きはかつてな想像を妨げているが、買収の優先権は、自分たちの都合で契約してすでに土地を占有していた入植者達に与えられていた。この内容のすべては、拡張した議会で承認されるために、オトエーミズーリ族の同意を条件としていた。¹⁰⁹

多くの、不同意の議論をしたあと、オトエーミズーリ族は、1876 年の 12 月 23 日に、議会で彼等の同意を表明した。痛恨の決意のなかで、彼等はこういつているのだが、“自分たちは、われわれの以前の酋長たちが広大な土地を、極々微量の代価で売り、そして、その時手にしたものをほんの僅かの間に食いつぶし、なくしてしまった、そんな前回の時と同じようなことをしたくない”ので、自分たちの土地の評価をするために指名されるひとは、“本当に誠実な人たち”であることを嘆願した。¹¹⁰ 合意事項が Big Elk、ならびに、そのほかの行政官が指名した酋長たちによりサインされた；Medicine Horse と、彼に追隨する者達はこれには同意しなかった。

土地の評価が 1877 年に完了した。Griest と、その彼の支持者たちの警告に応じ、120,000 エーカーばかりでなく、全体の保護居留区が評価されたことは非常に重要なことである。こうして売却された土地は、— 公式には、119,846 エーカー — 合計で 427,091 ドルで、これは、エーカー当たりの価格にすると、3.56 ドルであった。¹¹¹ 非常に広大な面積にまでなることを防ぐことにより投機家の意欲を抑えるよう、合意事項が、おそらく、上手に工夫されていたのであろう（同じようなことが最近になり、ボウニー族の保護居留区の売却のときにも起きていた。）が、しかし、結果は、オトエーミズーリ族にとっては、落胆せざるを得ないものであった。まず、第一に、競合入札ではなかったので、それぞれの土地は、ほとんど評価額か、あるいは、極めてそれに近い価格でしか、保証されていなかった：その周囲の土地でひろまっていた取引額のほぼ半分と言うのが、平均的な価格で、インディアン達が受け取った平均の金額は、評価額よりも僅かに高い、エーカー当たり 3.85 ドルというものであった。第二には、すでに占有しているものに優先権が与えられたので、そこに居座る人た

ちは、改めて何の支払いの発生もなくその土地をたむろし続けていた。ある者たちは、この木々を丸裸にするまで、長々と逗留していた。別の形の支払いというものがあったが、これは、決められたものとはまた違っていた。1878年に Griest は、オトエーミズーリ族は、土地はすでに入植されており、町が開かれ、そして、取引の店まで出来ているにもかかわらず、オトエーミズーリ族は、その土地を“目標とする売却を実行していない”と、後悔していた。1879年には、僅か 18,745 ドルが、政府の財務局の口座に溜まったが、これは、たった 967 ドルの利子がついただけであった。1882 年までに、184,737 ドルが集められ、そして、利子の支払いは、年間で 9,237 ドルまでになった。しかし、1887 年になっても、これは、実に売却から 10 年の歳月が経っていたのだが、全体の金額はまだ支払われていなかった。¹¹²

1876 年の売却のあと、事態は、急激にインディアン達の、彼等の保護居留区を完全に譲渡し、インディアンの強制居留区に移住するという方向に動いていった。嘆願に嘆願を繰り返したあと、Big Elk とかれに追隨する集団の訴えは、(Griest に阻止はされたが、) インディアン局長と意見を一にする人たちのために、無に帰した。一方、Medicine Horse とそのほかの世襲酋長達は、(彼等は、入植者たちから、実に温かい支援を得ていた) インディアン強制居留区に移住の強化を要請していた。この均衡は、次第に、保護居留区全体を売却するという方向に揺れ動いていった。落胆した Griest は、1879 年の彼の報告書の中で、インディアン達の中に“広まっている噂”は、彼等は去っていくというものであると、明らかにしていた。1876 年の売却から、如何なる利潤をも得ることが出来なかった失敗、保護居留区の残された東の地域にも侵入していく“いつもの略奪行為”、そして、“分裂、妬み、不信頼、そして、不満”への変化が、熱狂的なクェーカー教徒を支持する人たち以外のすべての人たちに対し、インディアン達の未来は南の地域に展開されていると思ひ込ませていった。¹¹³

1880 年の議会に、政府が指名した調査官の William J. Pollock が、オトエーミズーリ族を、彼に“自分たちのトラブル”を説明するために呼んだ。彼らは、これを非常に説得力のあるやり方で実行したので、次の日に Pollock は、内務長官に電報を送り、“たった一言、彼等は、インディアン強制居留区に移ることを望んでいる。彼等を思いとどまらせるためのあらゆる努力は、無駄のような気がする。沢山の者達がすでに、食事の皿を売り払ってしまうなど、彼等は、もう旅に出る用意をしている。”と説明した。¹¹⁴ 会議が開催される前でさえ、すでに 30 人ほどのオトエーミズーリ族の者達はインディアン強制居住区に向けて移動していたのだ；5 月の 18 日には、さらに 160 人もの者が Cimarron にある新しい彼等の土地、ここは、丁度 Sauk and Fox 族の保護居留区の西のある場所であるが、ここで合流していた。(fig. 43) こうした人たちは、Medicine Horse, little Pipe そして、Pipe Stem らに率いられた、畑で働く集団であった。かれらには、混血の者達は誰も合流していなかった。特徴として、彼等は、獲物の動物たちが沢山いる場所、そして、農業をするにはあまり適さない場所を選んでいった。インディアン局長は、彼等の配給を保留すると脅し

たが、しかし、彼は、彼等が、その数年間それを受け入れることを拒否し続けていたので、何の効果もない脅しに過ぎなかった。¹¹⁵

オトエーミズーリ族の残った者達も、1881 年 3 月 3 日の条約に基づき、ここでは、42,000 エーカーの彼等の土地がアメリカ合衆国に売却されたというものであったが、これに従い、ネブラスカを去っていった。インディアン達は、1881 年の 3 月 4 日に売却についての同意を与えていた。彼等の新しい行政官である Lewellyn Woodin は、9 月の 22 日に 224 頭の牛の群れを引き連れて南に向かって旅立ち、そして、インディアン達は、70 台の幌馬車で、200 頭の馬を連れて 10 月の 5 日に出発した。そして、10 月の遅くになって、インディアン達は、新しく設定されたポンカ族とポウニー族の行政官の管理する土地の間に位置した彼等の新しい 129,113 エーカーほどの保護居留区にティピーのテントを張る場所を選んでいた。(fig. 43) この保護居留区は、後の 1876 年の売却での収入を当てにしている先行と言う形で購入したものであった。Medicine Horse や、そのほかの反抗的だったインディアン達もこの地の選択に何の異も唱えず、彼等は、自分たちの親族に対する怒りに心を煮え立たせながら、Cimmarron の地に出て行くことを選択したのだった。¹¹⁶

Big Blue 川の溪谷に添った肥沃な土地を含む、残っていたオトエーミズーリ族の土地は、1882 年の後半に再び評価をしておされ、1883 年の 5 月 1 日のオークションに、160 エーカーが売りに出された。この時には、値段は、思惑的な入札の波にのり、つりあげられた。1 エーカー当たり平均で 6.08 ドルと評価されていた土地は、エーカーあたり平均で 12.22 ドルの値段がつき、これは、19 世紀の中でも、Great Plains に住んでいたほかのどのインディアン達よりも高い値であるとの榮譽を得た。入札の過程は、思惑とペテンに満ち満ちたもので、ここで当初購入した者達は、1883 年の 12 月の実施された二回目の売却の結果、全くの貧乏クジをひいたこととなった。この地域の多くの入植者達は、この評価された価格ではやみの土地を購入する資金がなかったので、うまく災難から逃れたと思った。しかし、本当にうまく災難を逃れた人たちというのは、彼らの土地の買い手が、1880 年代から 1890 年代にかけて次々に違った形での支払いを認められていったことから、それは、オトエーミズーリ族の人たちであった。1899 年には、依然として 124 もの支払い不履行の購入者が残っていて、オトエーミズーリ族は、270,000 ドルの貸しがあった。そして、次の年に、彼等は、借金を 168,784 ドルまで減額するという妥協を飲んだ。¹¹⁷ 彼等は、これが、彼らがどんな形であれ、どうにか金を手にする事ができる唯一の手段であるということを認識するようになっていた。

インディアンの強制居住区のなかでは、オトエーミズーリ族の社会の分裂が依然として尾を引いていた。新しい保護居留区は、オトエーミズーリ族のかつての土地ほど豊かな土地ではなかった：土地は痩せていたし、木々もあまり茂っておらず、水も良くなかった。彼らは、ポウニー族、ポンカ族、そして、オトエ族の行政官の部分的な仕事として管理されて、その行政官の言い分では、彼等は、この三つの人たちの中でも、“最も不平の多い”人たちと言うことであった。彼等は、ネブラスカの彼等の土地を売り、それから得られた

お金が、彼等を貧乏から開放していた時だけは、元気にしていたのに、“時代に逆行”し、“怠け者”で、そして、“やる気のない”連中とされていた。しかしながら、1876年の売却による利子の支払いが溜まり始めたときまでに、1854年の協約からの年金が僅か、5,000ドルまでに減ってしまい、そして、この基金の両方ともに、彼らによる、彼等自身の選択に基づいたものよりも、むしろ、インディアン局の思惑で、これが彼らのために使うわれるようになった。こうして、彼等は、伝統の Sun Dance や、そして、行政官の John Scott が“分けの分らぬ野蛮な風習”と呼んでいたものを反抗的に持続していた。行政官は、こうした風習を止めさせようとし、そして、もう一度、酋長を自分たちの言いなりになる者に置き換えようとした。¹¹⁸

こうしたなかで、Canadian 川の Deep Fork という支流が分岐する地点から南に 50 マイルほどいった地点で、Medicine Horse と、200 人以上のオトエーミズーリ族の人たち― 彼等は、正式には、“Absentee Otoe 族 浮浪のオトエ族”といわれた人たちが、アイオア族と Sauk and Fox 族の人たちの近くで、“心もとなく”ではあるが、しかし、独立した存在として生活していた。次第に、社会の傷が癒されていき、過去でもそうであったように、彼等を馬鹿にすることが記憶から薄れていった。次第次第にこの浮浪のオトエ族の人たちは、自分たちの親族の人たちと再び接触するようになっていった。彼等の数は、1886 年には 125 人まで減少したが、アイオア族が分配地を出て行った 1890 年までには、少なくとも、分裂という形での地理的な認識は消え去っていた。その年には、僅か、358 人のオトエーミズーリ族のものが残されていたに過ぎない。彼等の人口は、極々僅かの回復が始まる前の 1894 年には、340 人という、じり貧の状態に落ち込んでいた。¹¹⁹

消滅ということが、自らの運命であるかのごとく、それがぼんやりと見え始めた、1890 年代になってさえ、オトエーミズーリ族はアメリカ人の政策と指導に対して抵抗をし続けていた。それは、彼等が最終的に再分配地を受け入れざるを得なくなった 1899 年までは続かなかった。その年に、63,400 エーカーの余分な土地を残して、65,000 エーカーの土地が、441 人の家長のものと、そして、独身の成人に対して分配された。しかし、典型的な決断では、オトエーミズーリ族は、政府を強引に屈服させて、過剰な土地を売却するという許可を拒絶し、その結果、1907 年に、夫々の分配地の面積を 280 エーカーに広げた。こうして、保護居留区の全体が残ることとなった。しかしながら、彼等の土地を取り上げようという圧力は弱められるどころか、1912 年に、彼等の保護居留区で石油が発見されると、ますます強くなっていった。1920 年に迅速処理された協約の終結するときまでに、彼等の土地のほぼ、90 パーセントが、彼等の管理下から離れていった。¹²⁰

再分配地への長い道のり

ネブラスカのインディアン達の間で、ただ、オマハ族だけが、退去と言う圧力に完璧に対抗しえ、そして、多かれ少なかれ、再分配が実施されるまで彼等の保護居留区を守り

続けることが出来た。彼等がこれを為しえたことは二つの理由に関係していた。そのひとつは、まず、かれらが、少なくともアメリカ人の目からすれば、彼等は優れた農民達であったこと、そして、彼等のなかの進歩的な選ばれた人たち—多分、人口の 1/3 に相当する人たちが—が、政府の権威者達により彼等のためにつけた道標に従い、目を見張るほどの進歩を遂げていたとのことで、非常にうまくやっていたのだ：1875 年に、Barclay White が、Edward Smith 長官に対して、“オマハ族ほど、農業のやり方で進んだ技術を持っており、そして、進化した部族は”、“この指導監督区域のなかには、他に見当たらない。”と報告していた。¹²¹ 二番目には、これは、おそらく彼等のもつ、いい評判と、そして彼等の人懐っこさによるものであると思われるが、オマハ族は、彼等の土地を安全な土地にしておくことに手助けをした有力なアメリカ人たちの支援を得ていたからである。風変わりな活動家であった Thomas Henry Tibbles、彼は、ポンカ族の訴訟を取り扱う監督者であり、また、特に、1881 年に、Susette La Flesche (Joseph の娘) と結婚したあとは、オマハ族に属していた、が居たし；James Owen Dorsey、彼は、以前はポンカ族の世話人であり、民族学者として 1878 年から 1880 年にかけてはオマハ族と一緒に暮らしていた、が居た；そして、なんとも不思議なことに、不撓不屈の人類学者といわれた Alice Fletcher が居たが、彼女は、1881 年から、1884 年までは、Washington D.C. で働いており、そして、自分たちの分配地を手にするためにオマハ族の正式な籍を取得しようと保護居留区に住んでいた。

1870 年代においては、オマハ族は、他のネブラスカに住んでいたインディアン達と比較すると、よく繁栄していた。1870 年から、1884 年の間に、たった一年だけ、—1876 年のバッタの大群の被害があった—、彼等のトウモロコシの収穫が、20,000 ブッシェルに満たない年があった。大体、平均して 1 エーカー当たり 35,000 ブッシェル程度の収穫があり、常に 30,000 ブッシェル以上を確保していた。そして、だんだん、地中に保管するよりも穀物の損傷の少ない穀倉に貯蔵するようになっていった。毎年、沢山のトウモロコシが、(樹木や毛皮と同じように) 保護居留区のまわりにあちこちに出来てきた新しい街 (fig. 48) で、売られていた。事実、アメリカ人の市場が彼等の周りに出来ていた。トウモロコシに加えて、オマハ族は、実に大量の小麦 (これは、行政官が歓迎した穀物であった)、ジャガイモ、そのほか、沢山の野菜を栽培していた；彼等は、最初は果樹園や、枯れ草刈りから初め、そして、1,000 頭以上の馬、600 頭もの牛、そして、1,000 頭程度の豚を飼育していた。¹²²

1880 年までに、こうした農作物の生産は、男も女も一緒に働いていた個人の農場の収穫として上がってきていた。そして、1867 年の保護居留区の調査(ならびに、1865 年の協約の第 4 項に基づいて) に続いて土地の再分配が行われていた。彼等は、保護居留区のうち、東の 1/3 の地域に再配置され、ここは、とりわけ、川の流域を区切っている森林の沢山茂った谷に沿った場所であった。1873 年から 1876 年にかけて、共同生活のとりでとなっていた Big Village は、再分配地に人々が移り、文字通り空になっていた。たとえば、指導的な酋長であった Two Crows (Kah-a-num-ha) は、彼の枯れ草平野を入れなくても、18 エーカーもの開墾地を所有していた。彼と彼の 6 人の家族(この中には、2 人の妻がいた) は、North

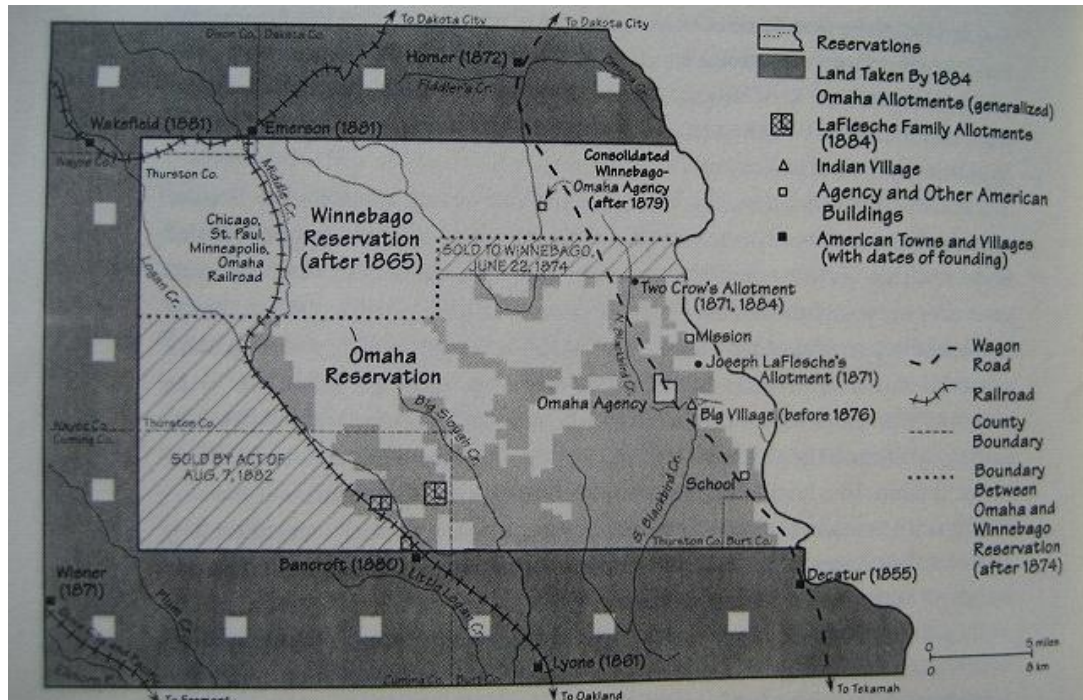


Fig. 48 オマハ族の保護居留区とその村 1880 年頃

Blackbird Creek に、自分たちの資金で建てた木造の家に住んでいた。(fig. 48) Joseph La Flesche は、ちょっとの間、部族から追放されていたが、その後、保護居留区に戻り、そして、その時にはすでに酋長ではなかったが、しかしながら、なお彼は、オマハ族の様々な出来事の中では影響力を持っており、丁度教会から南に広がる地域に 45 エーカーほどの農園を所持していて、政府の建てた木造の家に住んでいた。こうして、1880 年までには、保護居留区の中におよそ 100 軒以上もの木造の家が建てられていた。多くのそれほど裕福でない人たちは、やはり彼等自身の土地に住んではいたが、しかし、彼等の住んでいたところは、縦穴のような掘った家、もしくは、ティピーに住んでいた。冬になると沢山の家族が、木で出来た避寒小屋でキャンプをし、そして、夏になると平原のティピーに移り住んでいた。

123

また、バイソンの狩についても、依然として、それなりの成功を収めていた。オマハ族は、少なくとも 1876 年までは、毎年、年に一度は大掛かりな狩を実施していた。これは、彼等の行政官の Theodore Cillingham が、1874 年に説明しているように、彼等が十分な肉を確保するに唯一の手段であったために許可されたものであった。¹²⁴ とりわけ、こうした狩には、入植者達とのいざこざを防ぎ、或いは、他のインディアンの部族との衝突を避ける役目を持ったアメリカ人、ないしは、混血のもの達のお目付け役つきで、大体 300 人程度のオマハ族のものが参加していた。狩は、バイソンが、Saline とか、Solomon 川といった共有地のずっと上流の地域まで押し込まれていたもので、延々と続く仕事であった。大体

が、この狩の結果は、どんなバイソンの肉も儀礼の目的のためには大きな恩恵ではあったが、彼等のための食料、ないしは、毛皮という点においては、努力に見舞うほどの成果はなかった。しかしながら、1870-71年にかけての冬に実施された狩では大変な収穫があり、この時には、彼等が狩から戻ってくると、数日間にわたって、大量の鹿やエルクとともに、1,000頭以上ものバイソンの肉と毛皮の収穫を祝い、盛大なお祝いの情景が見られたに違いない。

土地を売却した毎年の年金は、1854年以来、ずっと継続して支払われていた。オマハ族は、年間、20,000ドル程度の現金、品物、ならびに、生活用品を1882年まで支給されていたが、これが、1894年まで、その協約の債務を完結するために、10,000ドルの12回払いという形となって残された。これは、大雑把に言って、ポンカ族、や、オトエーミズーリ族が、同じ期間(table 6)に受け取った額の2倍に相当していた。行政官は、四半期ベースで年金の予算を立てていた。たとえば、1871年の第四四半期には、家や、橋、そして、道路を建設したときの労働の見返りとして、\$2,502が現金で支払われ、残りの\$6,207は、主として、エンジニア、鍛冶屋、製材所の人間、農業指導者、そして、指導者（彼等

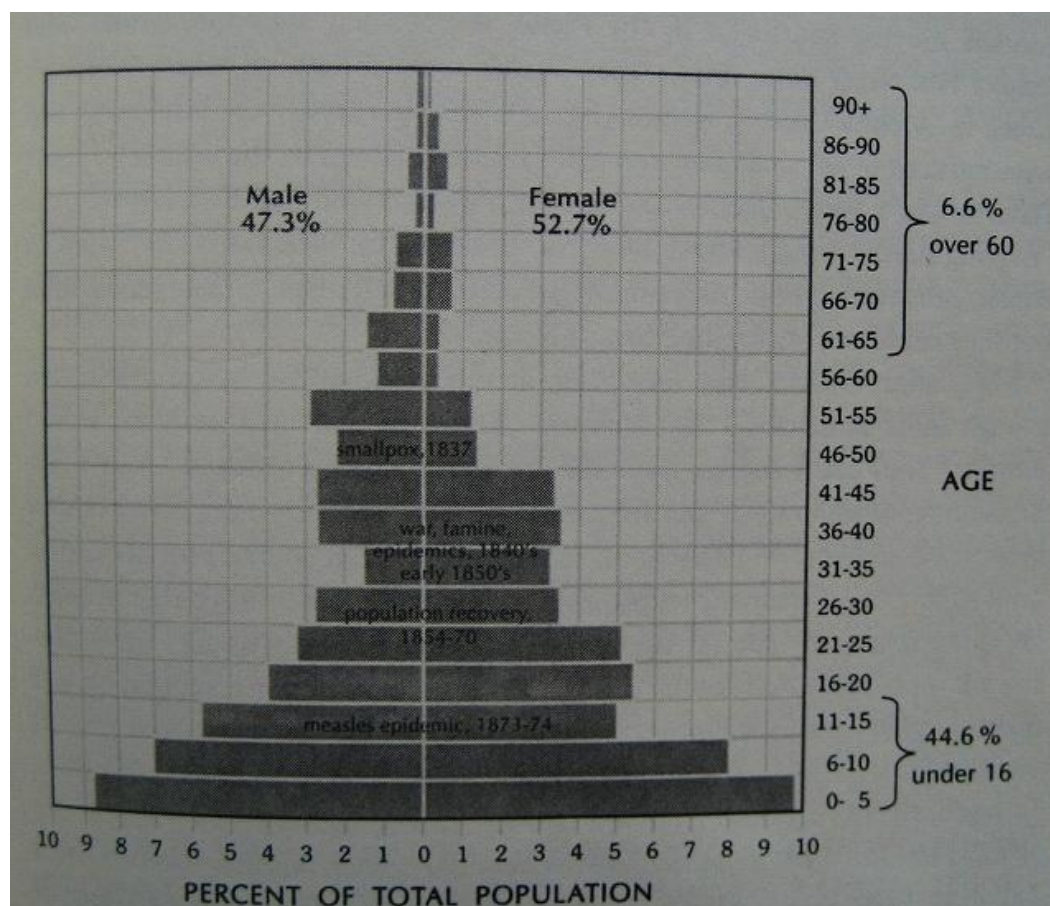


Fig. 49 オマハ族の人口分布ピラミッド 1886年。人口調査の記録にファイルされたもの、1885-1917

Nebraska State Historical Society, RG508 の好意による。

のうちの最後のものだけはオマハ族のものであった）たちに、依然として壊れたままの蒸気製材所を修理するためや、学校をやりくりするための支援のお金として支払われた。酋長達は、“極僅かの手当て”が支給され、27人組みの警察組織の費用が、やはり、年金から捻出された。¹²⁵

しかしながら、ポンカ族、ポウニー族、そして、オトエーミズーリ族との比較ということ以外の如何なる基準においても、オマハ族は、ぎりぎりの生活をしていた。彼等の人口は、1884年までに何とか回復が始まるまでの、1870年から1874年までは、人口は減りつづけた。(fig. 9) Painterが、1871年の秋には、マラリアで、“病気が流行し、沢山の死者がでた。”そして、1873-74年にかけて、栄養失調により、67人もの子供がなくなると報告していた。¹²⁶ 当局による統計が、毎年、人口の1/4の人たちが、ある種の深刻な伝染病にかかっていたことを示している。結核と肺炎が死亡の主な原因であった。オマハ族の人たちは、依然として彼等自身の医者の治療を信じ込んでいた。1875-76年にかけて、彼等の基金を使って、非常に大きな診療所が建てられたが、しかし、彼らは、自分たち自身の病気は、自分たち自身で治療しようとしていたため、この建物は、1879年以降は、工業化のための寄宿学校の建物として使われるようになった。

少なくとも、Two Crowsは、自分たち仲間の中での貧困は、消えつつあると信じていた。彼は、Tibblesに対して、行政官たちは、彼等がオマハ族は非常に状況がいいと報告したときに、“大きな嘘ばかりついている。”と書いていた。¹²⁷ Two Crowsは、そして、La Felscheもまた、オマハ族の女達はますます子供が妊娠できないような状況になってきており、子供達、生活環境が悪いために幼年の時期に、以前よりもたくさん亡くなるようになったと信じていた。人口のピラミッド構造を示していた1886年の人口調査は、まだ、この時期には非常に沢山の子供達が生まれていたことを示していたが、しかし、それはまた、彼らは15歳になる前に、多くが亡くなっていたことも示していた。90歳代では、(彼らは、スペインがルイジアナを統治していた時に生まれた人たち) 3人の男に対して、1人の女という比率になっているのにもかかわらず、人口の一番年寄りの部分でのピラミッド構造が非常に狭くなっていることは、それ以前の60歳代において、生存していたオマハ族のものが非常にすくなかったことを示している。事実、45歳以後も生き延びるということは、オマハ族の女達にとっては、非常に稀なことで、多分、それは、子供を沢山産み、そして、きつい仕事を強いられてきた結果なのであろう。このピラミッド構造は、19世紀の前半にオマハ族が経験したこと、一それ以前の病気、飢餓、そして、戦闘などの頻繁にあった時代に相当する歳の層が非常に少なくなっている一、そして、1854年以降に、全般に人口が増えていったことも表わしている。

人口が増えた時期に生きていたオマハ族の人たちは、彼等は、土地がまだ彼等のものであった保護居留区の時代の前の、何の束縛のない時代のことを思い出すことが出来る人たちで、その人たちは、特に、彼等の生活の中でのがたがたとした急激な変化によって振り回されていた。Joseph La Fleche、彼は1882年の話のなかで、彼がよくインディアン達

を見かけ、そして、“彼等が、まさしく、人たちだと考えていた。”頃のことを思い起こしていた。しかし、その後、アメリカ人たちが、“まるでムクドリモドキのようにやってきて、そして、そこらじゅうに広まっていった。”¹²⁸ あちこちにアメリカ人たちに溢れると、たちまち、動物達の姿がなくなってしまった。逆説的に言えば、それは、入植者達がこの地域に溢れたことによる“消滅”—アメリカ人以外にここに生きている動物が居なくなったということ—であり、このことが、長老の酋長である **White Horse** をして、“筆舌に尽くしがたい悲しみ”と思わしめ、そして、その寂しさはあまりにも深かったので、彼は、その重みに息が詰まりそうだと感じていた。¹²⁹

そして、1876 年は、オマハ族の歴史のなかでも、とりわけ重要な転換期となった年であった。¹³⁰ その年の 12 月に彼等は、彼等にとって最後となるバイソンの狩を実施し、600 人ものインディアン達が **Platte** 川から、**Republican** を通り、**Solomon** 川、**Saline** 川、そして、**Smoky Hill** 川に向かい南下してゆき、最終的には、カンザス州のウィチタ郡の **White Woman's Creek** に、小さな群れを追い込むまで移動していった。(fig. 43) 彼等は、非常に僅かの肉しか手に入れることが出来ず、**Hays** 砦で、軍から支給された非常用の配給に頼って生活をせざるを得ないような状況にまで追いやられていた。それは、“移動しているバッファローの群れ”は、**Waconda** により、用意されているように、いつでもそこに現れると信じていた人々にとっては、まさしく幻滅そのものであった。彼等は、儀式のために献金されるとそれで牛を買い、これを肉に変えてやりくりしていたが、しかし、彼等の失われた宇宙感を取り戻すことはできなかった。

かなり多くのオマハ族の大人たちは、殆どの人たちは新しい秩序は彼等の子供達が引き継ぐであろうものであると理解してはいたが、これに自分たちを順応させることを望まなかったし、また、それが出来なかった；“彼等は、しばしば自分たちの子供の将来に希望を寄せていた”と、行政官の **Gillingham** が、1875 年に報告していた。“が、しかし、また、彼等(比較的年取ったものたち)は、白人にはなれないとよく言っていたものだ。”と付け加えていた。¹³¹ 学校は、依然として、文化変容のためと言うことを主題としている状況であった。政府が、(クェーカー教徒の行政官である **Painter** の要請により)1869 年に **Ptresbyterian** 教会の寄宿学校に対する援助を打ち切ると、週 3 日の学校が、子供達に英語と、算数と、地理、そして、農業(男の子供達)と裁縫(女の子供達)といった手工芸の技術教育を取り入れ教育を始めた。学校は、一部は政府の、そして、一部は、オマハ族の年金から資金が用意された。加え、クェーカー教徒たちも、着物、履物、そして、そのほかの必需品を寄付した。学校の 1 つは、行政官の近くの **Furnas** の古いレンガ造りの建屋のなかにあり、また、別のものは北東に 2.5 マイルほど行ったところに建てられ、そして、三つめの学校が、保護居留区の南東の地域に作られていた。(fig. 48) なかには、学校に行きやすくなるように、自分たちのティピーを学校の近くに移すような親も居た。一番北の地域にあった学校は、この地域に土地の再分配をうけたオマハ族の数が少なかったこともあり、1875 年に閉められた。週二日の学校への登校の割合は、適齢期の子供達が 200 人以上居た

が、1875年には、平均して65人程度であった。

しかしながら、1870年代の終わりまでに、Two Crows と、その他、指導的な立場にある進歩的な人たちは、教会の寄宿学校を再開するような働きかけをしていた。Two Crows は、Presbyterian Board of Foreign Missions の Reverend John Lowrie への手紙のなかで、教員の質が、クェーカー教徒に肩代わりがされて以来、悪化してきたと説明していた。¹³² 1879年に、教会の学校が復活され、政府、ならびに、Prebyterians から提供された基金によって運営されるようになった。1883年以後は、その学校は、女の子だけを受け入れていた。政府は、そのほか、1879年よりもあとに診療所の中に建てられた新しい工業訓練の寄宿学校にも資金を提供していた。行政官の南東の地区にあった週日学校も開いていた。

1880年代の初めに、強制的に学校に入るようにとの政策の結果として、行政官は、200人以上ものオマハ族の子供達が英語を話せるようになると断言していたが、これは、一方では、彼等と彼等の独自の言葉しか話すことの出来ない両親との間の文化的な溝をより広めてゆくことに他ならなかった。最も見込みのある生徒たち（たとえば、Susette La Flesche）が、Elizabeth Institute（New Jersey）、Carlisle（Pennsylvania）、そして Genoa（もとのポウニー族の保護居留区のなかにあった）といった、保護居留区からは隔離された寄宿学校に送り込まれた。子供達は、大体、数年間、故郷から離れた状態に置かれ、彼等が戻って来たときには、かれらはそこに残された生活から取り残された形で、また、彼等を養育するはずの物知りたちから無視されていた。こうしたことに加え、保護居留区から、70人もの生徒達がいなくなっていたことは、自分たちの再分配地を何とか改善しようと頑張っていた家族にとっては、重大の労働力の不足という問題を投げかけていた。

こうした時代に、オマハ族の政治組織のなかでも大変な変化が起きていた。それは、行政官による、彼等自身による傀儡政府を作ろうという執拗な試みの最終的な結果として起きたものであった。保守的な人たちと、進歩的で現実的な人たちとの間の分裂は、保護居留区の当初のころから溝がひろまっていたが、1870年代までに、その分極化は取り返しのつかない状態にまでになっていた。一方の端の“酋長達の集団”の立場に立つものたちは、伝統的な生活習慣と、自分たち自身の力を維持しようという考えであった；一方の端の者達は、“若い年代の者達の集団”で、彼等は、やはり彼等の伝統的なものを崇拝していたものの、アメリカ式の教育や土地の再分配の政策に従い、これを受け入れていた人たちであった。クェーカー教の行政官たちは、年老いた酋長達のことを“横柄な、権威主義者たち”と考え、そして、彼等の権威に対する脅威となることを恐れ、再分配された土地を所有することに反対していた。とりわけ、行政官の Jacob Vore は、世襲の酋長となるシステムを廃止するように求め、そして、クェーカー教徒の政策に適合させようと、“部族のなかのもっと教養があり、そして、元気のいい若者”を応援していた。¹³³

クェーカー教徒の行政官であった Vore が 1880年に保護居留区を後にした、その時まで、彼は、彼自身の目標を達成していた。その年の3月に、オマハ族により酋長達の委員会の代表が選出された。当初は7人で、後に10人になったが、その議会が新しい行政府

となった。代表は、三番目の中立的な立場の酋長もいたが、相互に対立する意見をもつ二つの政治的な集団に対して同じ数が与えられた。このやり方は、民主的なやり方だったかも知れないが、しかし、これは、Voreにより仕組まれたもので、Fletcher と、La Flesche によれば、重要な決定事項は、“あらゆる政治的な決定権は、合衆国政府のインディアン行政局に集中している”と言うものであった。¹³⁴ こうして、オマハ族の独立に対する弾圧が、1820 年代の毛皮取引商たち、そして、最初の行政官の任命とともに始まった過程が、明らかにここに来て、できあがったのだ。

多くの変化は、まさしくオマハ族の主体性の心臓部を切り刻みながら、もっとずっと深くなっていった。1884 年から 1898 年にかけて、彼等の最も大事にしていたもの、すなわち、三つの神聖なテントが、アメリカの博物館に展示物としてさらされるようなことが起こった。このように最初に展示されたものは、戦闘のテントと言われるところに保存されていた儀式で使う戦闘のパイプ、神聖なる貝殻、そして、ヒマラヤ杉でできた柱であった。1884 年の 6 月 7 日に、Alice Flescher が、Massachusetts の Cambridge にある Peabody Museum の館長の Frederic Putnam に対して、そのテントのなかの“まさに保管物”は、その世襲的な保管人である Mon'hinthinge から贈られたものであると激昂して手紙を書いていた。¹³⁵ 長老のものが、自分は、死んだときには、それらを自分と一緒に埋葬してもらうつもりだといって、夕暮れの薄暗い光のなかでそれを厳粛に保管していたが、しかし、彼は、にもかかわらず、それらを将来オマハ族の子孫達が見て、そして、“彼等の父たちが歩んできた過去と、生活の状況に思いをよせることができるように”と、それらを博物館に保管したのであろう。彼は、この彼の行動について、将来、オマハ族の誰かが“厳しい非難の言葉を言う”に違いないと自覚していたが、しかし、彼は、その時点では、彼の仲間たちが、“彼等の父たちのしたやり方とは違う道を選んだ”ということが最善の改善策になると考えた。

神聖なる柱と、それに付随した神聖なるものを入れる袋が、この戦闘のテントの中のものに次いで、1888 年に Peabody に贈られた。バイソンの肉で作られたその最後の塗油が、1875 年に展示された。13 年ほど経ってから、Francis La Flesche が、Yellow Smoke (Shu'de-naci) に対して、“何故、あなたは、彼がぼろぼろの家ではなく、大きなレンガ造りの家に住むことが出来る、その東部の町に‘尊敬すべき人’を送らないのか？”と言って、彼の神聖なる責務を放棄するように促していた。Yellow Smoke が、その神聖なる柱を Francis La Flesche に贈った時こそ、それが、その世襲してそれを保管している人以外に触られた初めての時であった。多くのオマハ族の人たちにとって、僅かその二週間後に、Joseph La Flesche、彼は、Francis の父であるが、その彼が亡くなったということが、この信仰を守れなかったことと密接な関係を持っていることは疑いのないところである。

Francis La Flesche も、第三の神聖なテントのなかのもの、つまり、ホワイトバッファローの毛皮を、Peabody に移すように望んでいたが、しかし、その保持者である Wakon'monthin は、もう一シーズンだけそれを持っていたいと嘆願した。1898 年にこの

毛皮は盗難にあったが、結局はシカゴの科学アカデミーに納まった。紛失したことでがっかりしていた **Wakon'monthin** は、そのあと直ぐに亡くなった。ただ、二本の神聖なる柱、これは、一致団結の道具であり、そして、**hu'thuga** の二つの組織の象徴でもあったが、この柱だけが、オマハ族を不安定な将来に導く形で存在していた。

狂乱の変化のこうした時代に、全般にわたってオマハ族に関与していたことは、彼等の土地に対する彼等自身の所有権が必ずしもしっかりしたものではなかったということであった。行政官たちは誰も、この不確かな状態は、彼等の活力源をそぐものであり、そして、保護居留区の将来の発展を阻害するものであると報告していた。オマハ族は、当初は、ポウニー族、その後は、ポンカ族のこと、そして、最終的にはオトエーミズーリ族が、彼等の保護居留区を無理やりに迫り立てられ、そして、インディアンへの強制居住区に移り住んでいったことをよく観察していて、そして、その結果、次は自分たちの番であると懸念していた。“彼等は、自分たちの保護居留区、そして、その自分たちの家に熱烈な愛着を持っている。”と、**Jacob Vore** が 1877 年に記録していたが、彼はさらに、“そして、どんな変化の兆しであっても、それは、彼等の不安と、そして、深い苦悩の気持ちと呼び起こしている。”と付け加えていた。¹³⁶

彼等は、自分たちに警告する意味で、彼等の再分配された土地の所有者として自分たちを認める証明書が、何の法的な意味を持っていないということに気付いていた。その証明書は、当初、1871 年の 3 月に **Painter** により施行されたものであった。（**Painter** は、この証明書を取得する前提条件として、“アメリカ式の婚姻関係”をもつことを求めていたが、しかし、これは、何の効力も持たないものであった；1886 年という、その時代になってさえも、オマハ族の男達は 2 人の妻を持っていたのだ。）**Painter** は、その証明書は、インディアン達に対して“絶大なる満足感の源となるもの”と、観察していた。¹³⁷ 1871 年の 8 月までに、331 通の証明書が発行され、そして、その後の時代の流れのなかでもこのことは、歓迎されて続けられた。1877 年にポンカ族の強制的な移住を目の当たりにして、オマハ族の者達は心配になり、ある者はその証明書を地方の法律家のもとに持ち込んだ。ところが、そこでその法律家達が言ったのは、彼らの持っている証明書は、実質的には何の役にも立たないということであった。

1872 年から 1882 年にかけて、保護居留区の別の場所を売却すること、あるいは、テスト的に売却しようという試みがなされたが、これは、少なくとも、再分配された土地のある特定の場所についてのかれらの確固たる所有権を確保しようという、インディアン達の努力と密接に関係していた。もちろん、クエーカー教徒の行政官もまた、この最終的な目標を達成するべく、これを推進していた。1872 年の 6 月 10 日に、ポウニー族とオトエーミズーリ族の保護居留区の一部の売却を規定する同じ法案が議会を通過し、国務長官が、保護居留区の西の端の地域の 50,000 エーカーの土地を調査し、その価格を査定する権限を与えられた。オマハ族は、9 月 26 日に議会に対して、彼等の承諾を提出した。条項では、3 人の委員（その中の 1 人はオマハ族の人間であること）を、調査のためと、売却のときの公共

広告と、そして、封印した入札で購入し、土地を最も高い入札価格で売却することを監視するために任命することを規定していた。最小購入広さは、160 エーカーで、最低の売却価格は、エーカー当たり 2.50 ドルと決められた。得られた収益は、財務局に預けられ、年率 5 パーセントの利子で、半年ごとの支払いとされた。合衆国政府が、このお金を農業技術の改善と、そして、学校運営の基金として使う権利を保有した。¹³⁸

土地は、1872 年の秋に調査が実施され、委員会は、その結果の報告書を 1873 年の 1 月に提出した。区画に分かれた土地は、場所により \$1.25 から \$5 の間の価格が付けられた。5 月、ならびに、6 月と、夫々の区画の評価額を提示した、とても印象的な全面広告がニューヨーク、ニュージャージー、オハイオを初めとして、数多くの州の新聞に掲載された。ところが、その結果は、なんの音沙汰もないか、または、それにちかい状態であった。世の中は全くの不景気状態で、その土地は、毎年干ばつが繰り返し起こり、評価額は、その区域の周りの未開地の販売価格と比較してみると、かなり高いものになっていた。そういうわけで、最初の年には、僅か 300.72 エーカーが売れただけで、入ってきた金は、たったの \$700.19 に過ぎなかった。1873 年の 12 月 3 日に、インディアン局は、もっと魅力な、購入を促進するような条項の修正案を提出した。土地は、現金で価格を 1/4 に下げ、また、6 パーセントの利子で年三回払いとした。しかしながら、議会は、この修正案を認めなかった。1879 年までに、712 エーカーが売れただけだった。その結果、この土地は、1882 年まで、政府の管理下におかれ、その年になり *Loan valley* に沿って鉄道が敷設され、新たな割り増し価格が付けられた。¹³⁹

一方、オマハ族では、酋長たちが、ウィスコンシンのウィニベゴ族に対して、12,348 エーカーの土地を売却することにしぶしぶながら同意した、1874 年には、極僅かながらの増収があった。酋長達が売却を渋ったことには二つの理由があった。その 1 つは、殆どのオマハ族の者達は、この売却に反対していた；彼らは、すでにそこに住み込んでいたウィニベゴ族に対してあまり良い感情を持っておらず、ウィスコンシンのウィニベゴ族は、何かとそこで問題ばかりを起こしていた。彼等は、反抗的な部族であった— 単にインディアン強制居住区への移住に反対し、そして、彼等がネブラスカに到達したときには、少なくとも、彼等のうちの半分の者達は指定された再分配地に住み着こうとはしていなかったというわけであった。監督者であった *White* の意見によれば、少なくとも、彼等は、“つつけんどんで、ふてぶてしく、そして、不満ばかりを口にする連中” であった。¹⁴⁰

売却が、あまり評判が良くなかった二つ目の理由は、オマハ族にとっては、—ミズーリ川から 20 区画くらい保護居留区にずっと続いている (fig. 48) —素晴らしい森林地帯を失うということであった。その上、*No Knife* も含め、17 人のオマハ族の者が、ここに、再分配された土地を所有していた。行政官の *Gillingham* によれば、売却は、かれがオマハ族の酋長達に対して、同意するために *Washington D.C.* に訪問することを提案したあとになって初めて実施された。議会は、1874 年の 6 月 22 日に、実行を認めた。その二ヵ月後になり、酋長たちは、*Washington* に向けて旅立った。

6月22日の条項で、土地との交換に基づいて、オマハ族に対し、(文明化と言う目的で)\$82,000が支払われることになっていた。この金額は、エーカー当たりになると\$6.64となり、これは公正な値であった。政府は、現実には、ウィニベゴ族の1837年の協約基金の残ったものから、その金額と取り崩すとのことで、十分これを寛大に取り扱う余裕があった。ところが、それが実行されるときには、オマハ族は、この売却に対して、わずか、\$32,000を受け取ったに過ぎず、これは、エーカー当たりにして\$2.50という価格であった。このことは、(これは、少なくともSmith長官からの要請であった)残りの\$50,000と言う金額が、ウィニベゴ族を移住させる費用にあてがわれたのではないかと思われる。その取り扱いが、7月31日の議会で完了された。オマハ族は、12,348エーカーの土地の証書を譲り渡し、そして、自分たちのお金として、\$30,800.87の紙幣を手にした。そして、そのお金の半分は、即、馬車、馬の引き具、牛、鋤、そして、踏み鍬などの購入に当てられた。¹⁴¹

オマハ族が、ウィニベゴ族と諍いを起こすに違いないと考えていたことは正しかった。事実、両方の人たちの間での敵愾心が、1881年に政府の捜査の対象となった。調査官のC.H.Howardが、173頭ものオマハ族の所有する馬が1871年から1881年にかけて盗まれたという証拠を見つけた。犯人は、“踊り狂うウィニベゴ族”で、彼らは、しばしばウィスコンシンにいる自分たちの友達や親戚を尋ねて旅をしていた伝統的なインディアンたちであった。彼等はオマハ族の馬を泳がせてミズーリ川を渡り、そして、アイオアを横断している間、いたるところでそれを入植者達に売りさばいていた。一方、ウィニベゴ族の不平和は、オマハ族の男達が、彼等の部族の女達を虐待しているというものであった。調査官は、オマハ族の味方に立ち、その結果、ウィニベゴ族は彼等の年金から\$5,190(馬一頭につき、\$30)を差し引かれた。¹⁴²

不当な処理に、さらに、侮辱を加えるかのように、1879年には、彼等の行政官は、ウィニベゴ族の行政官と一緒にさせられるというように、オマハ族は軽んじられていた—ある意味では、否定されてさえいた。行政官の本部は、オマハ族が掛け合うのにも非常に遠く、そして、何よりも、敵意のある部族の、ウィニベゴ族の保護居留区の中に置かれた。1880年に、Gahige、彼は昔からの伝統的な酋長で、その彼が、インディアン局の長官に対して、自分はこれ以上ウィニベゴ族と諍いを起こしたくないので、彼等の独自の行政官を設置するようとの要請の手紙を書いていた。その同じ手紙のなかで、White Horseは、オマハ族は、自分たちは、“品行よく振舞っているのに”、ウィニベゴ族は、“反抗的であり”、そして、つねに行政官の手を煩わせているので、自分たちは無視され続けていると不満を漏らしていた。しかし、統一した行政官を置くことは、インディアン局の費用を節約することになったので、彼等は辛抱せざるを得なかった。¹⁴³

1874年の売却による収益は、オマハ族が不安に思う気持ちをなんらや和らげるようなことはなかった。事実、彼らは、後になり、自分たちは、1865年のときも、そして、1874年のときも、売却した土地に見合うだけの支払いを全うして受け取ったことがないと、議会に対して、これを問題視するように申し立てた。1870年代が終わる頃までに、この時代

の初めのころでは考えられなかったような土地再分配に関する法的な規制がなされ、オマハ族の者達(とりわけ、進歩的な指導者たち)は、もはや、彼等の怒りをぶつけることに躊躇するようなことはなかった。“あなた方は、われわれのところにとんでもないトラブルを持ち込んできたのだ。”と、**Joseph La Flesche** は、一般的には、アメリカ人に対する、そして、とりわけ、彼等が再分配された土地への移行を阻んでいたとして告訴されていた大統領に対して怒りを持って非難の言葉を書いていた。¹⁴⁴ このメッセージは、そのほかの沢山の条項を作ることを訴え、再分配地を安全なものにするための支援の訴えなどが、彼等の委任をうけた密使の **Tibbles** と **Dorsey** により、**Washington, D.C.** ならびに、東部のそのほかの町にもたらされた。しかしながら、**Alice Fletcher** が、1881 年の秋に保護居留区に到着するまでは、何一つ問題は解決されなかった。

Fletcher は、直ぐに、オマハ族の唯一の生き残り—強制退去を回避する唯一の方法—は、彼等の再分配地についての法的な認知であると思うようになった。その年の終わりまでに、彼女はこの効果についてまとめ、そして、その嘆願書を議会に提出した。53 人の男たちがこの嘆願書に署名し、そして、どれだけ長い間、また、忍耐強く、自分たちがこの土地を開墾し、農場を切り開いてきたか、自分たちは、自分の故郷を離れることがどれだけ寂しいか、そして、自分たちが自分たちの子供のために費やす財産がいかに必要なのかを訴えた：“われわれは、自分たちの権利をお願いするつもりでいる。”と、そして、“自分たちは、政府が根を上げるまでお願いを止めるつもりはない。”と **Waje'pa (Ezra Fremont)** が、望みを語っていた。¹⁴⁵ この嘆願書に署名した人たちは、オマハ族の家族のうちのごく一部の人たちを代表してただけで、ある人たちは、彼等のコメントの中で、率直に、“この所有権にこだわってはいない”他の人たちも居るということを表記していた。しかし、土地再分配の支持者には、**Joseph La Fletche, Two Crows, No Knife, Do-uba-moni (Harrison McCauley)**, **Sind-de-haha (William Hamilton)**, そして、**Shu-shury-g (Prairie Chicken)** といったような、非常に影響力を持った酋長達、或いは、以前の酋長であった人たちが含まれていた。彼等の側に立っていた **Fletcher** とともに、これは、彼等の決して挫折することのない力であった。

Fletcher は、1882 年の 2 月に、**Washington D.C.** に、嘆願書のなりゆきを追求した。そこで、彼女は、政策の立案者を彼女のシナリオに引き込むために政治家達の奥様や夫人達の作っている組織に足しげく通った。8 月までに、彼女は、オマハ族が彼等の再分配された土地の所有と、保護居留区の殆どの土地の所有を少なくとも一時的に補償するという条項の原案を作り、そして、これを議会に提出して、なんと、実にいとも簡単に通過させてしまった。**Hiram Price** 長官でさえも、**Fletcher** が、法律の立法化に多大の貢献をしたものと認識していた。¹⁴⁶

1882 年の 8 月 7 日の条項、これは、**Sioux City and Nebraska Company** に対して 1880 年の 4 月の 17 日に払い下げられた鉄道の線路用地の西側に広がっている保護居留区の一部を、調査し、土地の評価をし、そして、売却するということを規定したものであった。こ

の鉄道は、シカゴ、セント・ポール、ミネアポリス、そして、オマハ鉄道として運営されていたもので、Logan Creek (Fig. 48)に沿って走っていた。そして、ここは、オマハ族が、1872年に売却をしようとしていた土地と同じ場所であった。その土地は、少なくとも、エーカーあたりは\$2.50をくだらない評価額に従い、40、80、ならびに 160エーカーずつの区画で売却されたものと思われる。入植者達は、その支払いを済ます以前に、一年間にわたり彼等の土地を所有し、そこで、収穫を上げることを許容していたが、その条項は、もし、国務長官が、それが妥当であると認めたようなときには、別途の支払い手段も含めた、支払い期間を変更できるというような可能性もまた残していた。売却による収益は、オマハ族に対し、年金、もしくは、半年ごとと言う基準で利子が支払われるように財務省に預けられた。

Logan Creek の東側の保護居留区は、再分配地にあてられ、夫々の家族の家長に対して160エーカーが、そして、独身の成人、ないし、孤児の子供には、80エーカーが、さらに、18歳以下のものには夫々40エーカーが分け与えられた。どの場所にするかは、夫々の家族の家長、独身の成人、そして、孤児の場合には、行政官によって決められた。彼等は、もし望むのであれば鉄道の西側の土地も選択することさえ出来た。以前の分配のときの所有により承認された土地の所有者は場所の選択の際に、もとの土地にするか新しい土地にするかの選択権が与えられていたので、彼等は自分たちの農場を保持することが出来た。割り当てをされた人は、土地の所有権利書を発行されたが、以前と変わらず、その土地の権利書は、25年間の協約の間は政府のもとに管理されていた。多くのインディアンたちの場合よりも幸運であったのは、オマハ族はこの土地の再分配が実施されたあとに残っていた余分な土地を所有することが許されていたことであった。この残された土地は、オマハ族の信頼のもとに政府により管理され、そして、この協約の機関の間に誕生した子供に土地を追加分配するというときのために保持されていた。¹⁴⁷

丁度うまい具合に、土地の再分配の割り当てを監視する仕事が、Alice Fletcher に指示された。彼女は、1882年の3月に特別行政官として任命され、そして、4月の末までに、再分配を実施する準備をした。Fletcher は、周辺の土地が、非常に肥沃で、大平原のほうに延々と広がっており、そして、鉄道に程近く、それはおそらく営業的に農場を開くには持ってこいと思われると認識していたので、意図的に Logan Creek の土手のテントの中に自分の事務所を構えた。

彼女の将来の共同作業者であり、かつ、生涯にわたる友となった Francis La Flesche の助けで、彼女は、再分配の作業を系統的に開始した。彼女のとった方法は、“かなり形式的なものとして”記述されたものにより区分されていた。彼女は、立会人の前で書類に署名をする(もしくは、印をつける)ことも含め、殆どが儀礼的な選択をするやり方が、インディアン達を財産の所有と法的な保証に導くこと、オマハ族に対する“恒久的な価値”の教育になると信じていた。彼女は、証明書の保有は、彼等が開拓した土地の継続的な所有件を保証されるものと確信し、彼女は、言い争いとなっている不満を(インディアンの

指導者と相談し)公平に処理した。この過程において、彼女は、家族の関係や、子孫の系列を明確にし、こうすることにより再分配地の相続が将来問題にならないようにするなど、初めてオマハ族の科学的な人口調査を実施した。インディアン達の不満の多くは、自分たちの妻が、独自の土地を得ることができなかったこと、その基本的な考えは、“伝統的な昔からの家族のなかでは平等という考え方に” 相反するというものであった。この問題は、1893 年 3 月 3 日に、80 エーカーの分配が妻達の独自の所有として与えられるという修正案により、解決された。¹⁴⁸

Fletcher の“大変立派な仕事”(この賞賛が George Wilkinson 行政官から与えられた)が、彼女の命を縮めるまでになっていた。非常に過酷な仕事と、大平原に住むという不自由な生活が、8 ヶ月間に渡り、彼女の持病であるリウマチで彼女を寝たきりのままにした。それでも彼女は、病床から再分配地の署名を発行し続け、ついに、この分配に反対していた保守的な家族に対しての分配を何とか完了させ、彼女の仕事を完遂した。1884 年の 7 月 11 日、彼女は Price 長官に対し所有権を分配するスケジュールを提出したのであるが、この時まで、こうして、1,194 人分、76,810 エーカーの土地に対して、954 の所有権が交付された。この時に、55,000 エーカーの土地が共有地、これは、将来の分配に必要なものとして別に確保された。¹⁴⁹

保護居留区の地理は殆ど一晩にして塗り替えられた。再分配地の 1/3 に相当する土地が、鉄道に隣接する街の地域として選別された。(fig.48) こうした選別は、Fletcher の、“市場に近いということ” が、将来の繁栄に繋がるという勧告を忠実にまもっていた La Flesche の家族もふくめ、主に進歩的なインディアン達により、なされた。879 エーカーの土地を含めた土地の再分配は、Wilkinson を駆り立て、こうしたオマハ族は、これまで、“白人達に直接彼等の沢山の財産を与えてきた” と宣言させ、鉄道の西側の地域に展開された。¹⁵⁰ 市場の近くにと臨んでいたほかの人たち (この中には多くの混血の人たちがいた) は、Decatur とか、Bancroft などの街に近い保護居留区の中の南の境界地域に沿って自分たちの土地を選んだ。しかしながら、オマハ族の多くのほかの人たちは、行政官とか、Fletcher の報告のなかでも殆ど注目されず、彼らは、昔からの、家族主義のもとで、ミズーリ川沿いの台地、ここには沢山の樹木が繁茂していたが、ここに、分断された形で散っていった。分配されずに残った土地の最も広い場所—ここは、共有地として確保された—は、保護居留区の北西部で、ここは木も生えていない荒涼とした土地であった。Logan Creek やミズーリ川の洪水台地に広がる痩せ干上がった土地もまた、敬遠された。¹⁵¹

鉄道の西に広がる土地は、1884 年の 4 月 30 日にアメリカ人入植者達に開放された。これに加え、1882 年の協約の第二章のなかの条項で、すべての土地は 1885 年の 6 月 1 日まで再分配されないということになっていたが、24 番の街の地域の、東 7 番の領域が、購入可能となった。この時売りに出された 50,127 エーカーの評価額は、\$512,670 になり、これは、エーカー当たり \$10 以上であった。これは、当時、保護居留区の周辺地域の土地の平均価格にも見合う公正な価格であった。土地の売却は、1885 年から 1887 年にかけて、盛んに行われ

たが、しかし、沢山の入植者達にとっては、そこに記述された年の間に支払いを済ますことは困難なことであった。1885 年と、1888 年、そして、1890 年にも、国務長官が、支払い方法の幅を広げるなどして購買の期間を延長するなど、彼の権威を発動した。しかし、支払いを促進するような施策はなんらとられなかった。このことが、オマハ族にとって、収入を得ることを遅らせたが、しかし、長い間のこの動きのなかで、これはむしろ、彼等に年率で 5 パーセントの利子を支払うという形で逆に有利に働いた。1891 年までに、彼等の財務省の口座には、毎年の支払いとして、\$9,366 が、これは、1 人当たりにして、\$8 ドルとなったが、これに見合う \$187.317 が溜まった；そして、1914 年までに、ほぼ土地の全部が売却され、その収益は \$821,907 にまでなり、これは、1300 人いたオマハ族の人たちに対し、年間の利子として \$41,095、1 人あたり \$32 の利益をもたらした。全体の額としては、決して多額と言うわけではないが、しかし、これは、1854 年の協約からの古い形の年金に代わり、すこし違った形のものとして実現され、そして、その最後の 7 回払いの収益は、1888 年と 1889 年の 2 年にわたり、それぞれ合計で、\$35,000 にもなる支払いとなったが、これは、再分配を別の形でより有効に実施した結果ということであった。¹⁵²

オマハ族は、再分配地を引き継いだときに、連邦政府の監督から解放されることも願っていた。彼らは、自分たちのことは自分たちで処理することを望み、そして、アメリカ的なやり方をする中で手にした新しい形の独立を享有したかった。勿論、Price 長官はこのことを歓迎し、そして、1884 年の 9 月 30 日には、行政官が雇っているすべての雇用人(行政官自身と学校の先生以外)は、その職を解かれ、製材粉引き小屋、小物屋、倉庫、お店、そして、そのほか政府が管理していたすべての財産がオマハ族の議会のメンバーに譲り渡された。1887 年に、オマハ族—ウィネベゴ族の行政官を引き継いだ Jesse Warner は、これは、“このような状況に置かれたインディアン達が、自分たち自身で自分たちのことを処理する能力があるかどうかを実験的に確認する”ものであると宣言した。¹⁵³

最初は、オマハ族は、この試みに失敗したかのように思われた。再分配地への移住は、農業生産、ならびに、人口という両面で減少していくという形に終わっていた。(fig. 9) 社会は、La Flesches のような独立した家族であってさえも、そうなるべき運命にあったかも知れないが、分散し続けた。しかし、順応が進むにつれ、オマハ族の人口が回復し、そして、ゆっくりながらではあるが増加を始め、1900 年には 1,200 人までになった。幾つかの家族は自分たちの土地で農業をうまく経営するようになった；そのほかの者達は、もっと手軽に、入植者達に土地を貸して収入を得ていた。1896 年までに、なんと、102 もの再分配された土地が、そして、共有地として保管していた 30 の土地が、農場、あるいは、牧場として貸し出されていた。農場の使用に対しては、年間エーカー当たり、大体 25 セントの比率で、そして、農地に関してはエーカー当たり 1 ドルという使用量であったが、このシステムが、(行政的には認可されていなかったが、) オマハ族にいくらかの収入をもたらしていた。

彼らは、規定された協約の期限が終了するまえに、貧困であるとか、個人的な所有権を押し付けた政府の執拗な政策に強いられて、彼等の再分配地の売却を始めた。1910 年ま

で、それまで必死にそれを保持しようと厳しい戦いを続けてきた広さにして 50,000 エーカーの土地全部がこうした形で彼等の手から離れることになった。1955 年までに、オマハ族の手に 28,405 エーカーの土地を残し、こうした形で手放された土地は、107,297 エーカーまで増大した。¹⁵⁴ 彼等は、自分たちの保護居留区を維持しつつ、再分配地へ忠実に移住をしたが、しかしながら、やはり彼等は土地を奪われたのであった。